柳田國男著

蝸牛考

柳田國男著

（言語誌叢刊）

蝸牛考

刀江書院

小序

前年東條氏の試みられた靜岡縣各村の方言調べ、又は近頃岡山縣に於て、島村知章君佐藤清明君等の集めて居られる動植物名彙などを見ると、言葉が相隣する村と村との間にも、尚著しい異同を示す例が、日本では決して珍しくないといふことがわかる。府縣を一つの採集區域とした方言集が、よほど氣を付けぬと正確を保ち得ないのは勿論、親切なる各郡々誌の記述でさへも、果して能く隅々の變化までを代表して居るかどうか。時としては稍心もと無い場合がある。我邦が世界の何れの部分にも越えて、殊に言語の調査を綿密にする必要があり、又大いなる價値があると思ふ理由は、獨り人口の夙に溢れたゞよひ、土著の順序が甚だしく入組んで居るといふだけでは無い。海には何百といふ小島が、古い新らしい色

々の村を形づくり、一方には又小國五箇山中津川といふ類の奥在所が、嶺に取圍まれて幾つと無く、異なる故鄕の人を定住せしめて居るのである岬の端々に孤立する多くの部落などは、今まで何人も心付かなかつたけれども、實際はこの島と山里と、二つの生活の特質を兼ね備へて居るのであつた。さういふ土地の方言報告は、遲れて到達するにきまつて居る。故に若し國語の調査を周到ならしめんとすれば、進んで我々の方から指定しなければならぬ區域が實は、日本には非常に多かつたのである。

それが今日まではまだ一つとして指定せられたものが無い。方言採錄の事業は既に過去四十年に亙り、其編述も亦數百の多きを見たけれども、尙我々の資料が貧弱の感を免れないのは、言はゞ有用なるものが餘りに豐富なる爲であつた。私は自身數年の實際によつて、誰よりも痛切にこの不備を認めて居る。從つて言語誌叢刊の將來の收獲に向つて、最も大いなる期待を繫けて居る。それがこの現在の乏しい智識を基にして

歸納の方法を試みようとすることは、或は自己の危險を省みざる所業であらう。併し新たなる次の發見の爲に、覆へるかも知れぬのは粗忽なる私の假定であつて、私が處理し整頓して置いた事實ばかりは、たとへ追々に其重みを加へぬまでも、兎に角にそれ自身の意義を失ふことは無いと信ずる。此方法は今後の資料の累積と比例して、歩一歩完成の域に進むべき希望あるのであるが、假に不幸にして尙當分の間、日本の採集事業が今の狀態に放置されることにならうとも、少なくとも各地に散在する同志の人々を、糾合し又慰留するの效果だけはある。我々は所謂方言の理論、方言が國語の眞實を闡明する爲に、如何に大切であるかを既に聽き知つて居る。それが一二の進んだ國に於て、最近どれ程の成績を擧げたかといふことも、頼めば講說してくれる人が必ず有るであらう。獨り欠けて居るかと思ふのは學問の與味、斯ういふ切れ〲の小さな事實を集めて行くことが、末にはどういふ風に世の中の智慧となるか。それを眼の

前の生活に就いて例示することであつた。是にも方式があり又準備が無ければならぬが、私には徒然草の說敎僧のやうに、乘馬の稽古の爲に費すべき若い日が無いので、其支度の調ふのを待ちきれずに、忍んでこの未熟の初物を摘み來つて、やがて大きな御馳走の出るまでの、話の種にしようとするのである。我々俗衆の學問に對する手前勝手な要求は、第一には之に由つて怡樂を得、又安息を得んとすることである。それには萬人の幼なき日の友であり、氣輕で物靜かで又澤山の歌を知つて居るデデムシなどが、ちやうど似合はしい題目では無かつたかと思ふ。

我々は田舍の生活に遠ざかつて居る爲に、既に久しい間この蟲が角を立てゝ、遊んであるく樣子を見たことが無い。其進步の痕の幽かなる銀色をしたものが、眼に付くことも段々に稀である。都府の庭園が日照り耀いて、餘りに潤ひの足らぬといふことも、蝸牛の靜かなる逍遙を妨げて居るか知らぬが、一つには我々の心があはたゞしく、常に物影の動きを省

みようとしなかつた故に、是も多くの過ぎ行くものと同じく、知らぬ間に無くてもよいものになつてしまつたのである。我々はこの小さな自然の存在の爲、もう一度以前の注意と愛情とを蘇らせ、之に由つて新たなる繁榮を現實にして見たいと思ふ。所謂蝸牛角上の爭鬪は、物知らぬ人たちの外部の空想であつた。彼等の角の先にあるものは眼であつた。角を出さなければ前途を見ることも出來ず、從つて亦進み榮えることが出來なかつたのである。昔我々が角出よ出よと囃して居たのは、即ちその祈念であり又待望でもあつた。角は出すべきものである。さうして學問が又是とよく似て居る。

かたつむりやゝ其殼を立ち出でよあたらつの〳〵めづる子のため

昭和九年六月初六　　柳田國男

目次

附

言語の時代差と地方差

國語の成長、卽ち古代日本語が現代語にまで改まつて來た順序と、方言の變化卽ち單語と用法との地方的異同と、この二つのもの丶間には元來どういふ關係があるのか。それを私は稍明らかにして置きたい爲に、幾つかの最も有りふれたる實例を集めて見た。現在保存せられてある多量の記錄文學は、其著述の時處が知れて居る限り、又其傳寫に誤謬改作が無かつたことが確かめられ得る限り、何れもそれ〴〵に過去の言語現象の、前後相異なることを語るものではあるが、その飛び〳〵の事實の中間の推移に至つては、概ね尙不安全なる臆測を傭はねばならぬ以上に、それが何故に甲から乙丙へ、進み動くべかりしかの原由は說明してくれない。ところが方言は我々の眼前の事實であり、今も一定の法則に據つて繰返されて居る故に、いつでも其觀察者に向つて自分の性質を告げようとして居る。若し比較によつて幸ひに發生の順序を知り得べしとすれば、それが同時に亦我國語の歷史の爲、史料の年久しい缺乏を補ふことになりはしないか。我々の兄弟が旅を好み、田舍の物言ひのをかしさに耳を傾け心を留めたのも、千年以來のことであつた。昧

に明治に入つてからは、之を調査する爲に大小種々の機關さへ設けられた。しかも此四大國にある總論に於ては、尚將來の冒險者に期待すべき區域が、斯樣に廣々と殘つて居たのである。

私たち民間傳承の採集者は、實は殆ど皆言語學の素人ばかりであつた。單に文書以外の史料から、過去の同胞民族の生活痕跡を見出さうとするに當つて、あらゆる殘留の社會諸事相の中でも、特に言語の現象が豐富又確實なることを感じて、豫め之を分類整頓して、後々の利用に便ならしめんとして居たのである。さうして其方法が未だ明かで無い爲に、本に謂つて幾分か自ら指導するの必要を見たのである。既に專門家の技能を學び得なかつた故に、この自己流は甚だしく迂遠であり、又勞多きものであつた。到底職業ある人々の再び試みるに堪へざるものであつた。從つて其中間の經過を報告することは、一方に同情ある批判者の忠言に由つて、自身今後の研究を有效ならしむると共に、更に他の一方には若干の採擇するに足るものを以て、次に來る人々の準備の煩を省くことになると信ずる。著者の結論若くは現在力支せんとする假定は、一言に要約すれば次の如きものであつた。曰く方言の地方差は、大體に古語退縮の過程を表示して居る。さうして一篇の蝸牛考は卽ち其例證の一つである。

四つの事實

最初に方言の觀察者として、先づ少なくとも四つの事實が、我々の國語の上に現存することを認めてもらふ必要がある。是が又自分の蝸牛を研究の題目として、わざ〳〵拾ひ上げた動機をも說明するのである。

第一には方言量、斯ういふ言葉を新たに設けたいと思ふが、日本の方言は全國を通觀して、その目的とする物又は行爲毎に、非常に顯著なる分量の相異がある。たとへば松は昔からマツノキ、竹は昔からタケであつて、如何なる田舍に行つても日本人ならば呼び方を變へて居ない。動詞にも形容詞にも是と同じ事實はあるが、說明が煩はしいから主として物の名を掲げる。小さな動物で謂つて見ても、土龍は何れの土地でもムグラモチか、ウゴロモチかイグラモチかであつて、其以外の別名は殆ど聽かない。蜘蛛はクモでなければ、クボかグモかキボかクーボー轉音するのみであり、蟻はアイ・イヤリ・イラレ等に變つて居る他には、僅かにヤリ・ヤーミ・アーリ又はアリなどゝなるばかりで、異なつた名詞は一つも無いと言ひ得る。是に反して魚では丁斑魚、是

にはメダカ・メンパチの如く、眼に注意したもの、他に、尚ウヰメ・ウキヽ其他の十數種の地方名があつて、それが又細かく分れて居り、蟷螂にはイボムシ・ハヒトリ・ヲガメ等の、全く系統のちがつた二十に近い方言が、いつの間にか出來て相應に弘まつて居るのである。蝸牛が又其中の驚くべき一例であることは、讀者は程無く飽きる位それを聽かされるであらう。此等の事實から察して、方言生成の主たる原因が、必ずしも國語の癖であり、又は歴史の偶然であつたとは言はれないこと、卽ち地方言語の差異變化を要求する力が、目的物そのものにあつたといふことが、直ちに心づかれるわけである。方言と訛語とを混同した從來の誤り、それから矢鱈に數多く松や櫻の地方名までも集めようとした、前の調査者の無用なる難題も、やがて悔いられる時が來ると思ふ。

第二には方言領域、この術語も是から大いに用ゐられる必要がある。個々の事物に對する個々の單語は、やはり各自の支配力を持つて居て、たゞ同種の事物に於て對抗して居る。別な言ひ方をすると、蟷螂丁斑魚の方言を共同にして居る土地でも、蝸牛なり土筆なり兔なり、其他の多くの語は別々のものを用ゐて居て、あらゆる方言を取揃へて、甲乙異なる組といふものは無いといふことである。尤も大數の上から見て九州と奥羽、又は中央部と國の端とは、差異が多いといふ

ことは有り得るが、それにも例外は甚だ多く、豫め命名法の一つの傾向の如きものを測定することは出來ぬ。個々の方言はそれ〴〵の領分を、何れも自分の力を以て拓き又保持して居て、しかも方言毎に其地域には著しい大小がある。是も二三の實例はいと容易に之を立證するが、それを重ね取り寫眞の如く積み重ねて見た上でないと、近年唱導せられた「方言區域」の說、即ち東國方言とか上方言葉とかの名目は、訛り即ち音韻の變化以外には、まだ中々安心して之を採用し得ないのである。

第三には方言境堺、即ち二以上の方言領域の接觸面には、他では見られない特殊の現象が發生することも認められなければならぬ。その特殊相といふのは、（イ）には數語併存であり、（ロ）には即ち方言複合である。一つの土地の一つの物體には、一つしか方言は無いだらうといふ今までの想像は、之に由つて恐らくは覆へされるであらう。方言の蒐集者に取つては、この境堺上の言語現象は、可なり印象の深いものである。將來の方言區域說は、專ら此方面から省察せられて、更定せらるべきであらうが、大體に同じ錯綜の起り易い土地といふものがあるから、將來は獨り方言の分布を知る爲のみならず、尙交通と移住との歷史に對しても、或は若干の光を投げることと

にならうも知れぬ。是も後に詳說するつもりであるが、加賀能登越中は特に蝸牛の方言に富み、最も數多き小領主を簇立せしめて居る土地であつて、同時に又蟷螂と雀とに付ても、澤山の方言をもつて居る。他の一方關東の利根川下流と、其南岸十數里の平地は、やはり雀と蝸牛との二種の方言に富んで居るのである。雀の如き變化の少ない名詞が、特に此二地方に於て、蝸牛と同樣の境堺性現象を示して居るといふことは、何か共同の區域說に便利なやうであるが、斯ういふ一致はまだ他の動植物に付いては見出されて居ない。たゞ幾分か遠方の旅客の來往が繁かつたらしき地域に於て、殊にこの錯綜の傾向が著しいといふのみである。東國ではまた山梨縣、それから三河の碧海郡なども此例に引くことが出來る。九州の島では大分縣が、少なくとも蝸牛だけに付いては、可なり紛亂した境堺線を持つて居る。自分だけの假定としては、此現象は方言の輸送、卽ち人は遷らずとも新たに隣境の用語を採つて、我が持つ以前のものを廢止する事實が、度々あつたことを意味するかと思つて居る。若しさうだとすると是は交通の問題であつて、方言區域の說を爲す人の心中の前提、卽ち九州人だから九州方言を、保留して居たと見る理由としては、頗る困難なものになつて來るわけである。

第四に方言複合の現象は、あまり長たらしいから茲では略して置く。一方數語の併存といふことは、やはり文化の交通と關係があることで、人は或は之を採集地域の限定に基くものとし、たとへば一縣の方言としてならば、富山石川の如く蝸牛に數十種の名稱があることになつても、之を郡又は村大字として見るならば、やはり土地には一つしか方言は無いのだと思ふかも知らぬが事實は決してさうでは無い。卽ち個々の話者を單位として、一人が知つて居る語も亦幾つかあるのである。是は結局定義の問題に歸着するかも知れぬが、耳の方言卽ち人が言ふのを聽いて、卽座に會得するものも亦其土地の語であるのみならず、それと純乎たる口の方言、卽ち平生自然に口へ出る語との中間にも、實はまだ幾つかの階段があるので、常には使はぬが稀には使ふ、若くは少し聽耳を立てさせようと思ふときに、改めて使ふといふ方言もあるのである。もし方言の領域が非常に小さくなつて、たとへば常陸南部の蝸牛などのやうに、次の部落に行くともう別の名があるといふ迄になれば、それが緣組によつて更に交錯し、小兒は母の使ふ語に附くといふこともいと容易で、後には家々で選擇を異にするといふ場合さへ現れて來るわけである。しかも此樣な事實は、決して廣大なる一つの方言領域の、中央部に於ては起るべきものでなかつた。距離と

交通方法の便不便とが、私の言はんとする個々の方言量、及び其領域の大小と、深い關係を持つて居たことは、疑ふことが出來ないのである。しかしながら是はかりでは說明し難いことは、如何にして最初同一の事物に付いて、二つ以上の單語が分立し、又割據するやうになつたかといふことである。幾つかある同種方言の中で、或者は曾て廣大なる領分をかゝへ、又他のものは狹い區域に引籠つて居たのかといふと、其選擇なり流行なりの根本に、既に一種新語作成の技術、即ち前から名のあるものに、もう一つ好い名を附與しようとする企てと、それを批判し鑑賞し又採用する態度とがあつたこと、別の言ひ方をすれば、言語も亦廣い意味の文藝の所產なりしことを、想像せぬわけには行かぬのである。それが今日までの方言變化の上に、果してどの程度まで一貫して居るか。又所謂標準語の確認に向つて、どれだけの支援を與へて居るか。現在用ゐられて居る日本語の語數は、恐らく千年前に比して數倍の增加を見て居る。しかも只其一小部分のみが、新たなる文物と伴なうて、國の外から輸入せられたのである。さうすると其殘りの部分の增加は、何の力に由つて之を促したのであるか。誰か文化の上層を占むといふ者で、意識して之を試みたものが一度でもあつたらうか。いつも彼等が「匡正」に努力した、方言の亂雜といふことを假に無

かつたとしたならば、果して同じ結果を得られたであらうかどうか。斯ういふ問題も一應は考へて置くべきものであつた。

方言出現の遲速

右に列擧した四つの事實が、幸ひに是からの立證によつて愈々確認せられるものとすれば、次には個々の言葉の年齢といふものを、考へて見るのが順序である。今までの學者には、兎角古い語と正しい語と雅なる語と、この三つを混同しようとする癖があつたやうだが、正しいといふ語は要するに聽く人に誤解をさせぬ語であらうから、土地と時代とによつて變つて居たのみならず、前にも述べたやうな邊境現象に於ては、同時同處にさへも幾つかの正しき語はあつた筈である。さういふ中から是が一番上品だと認めて、人も我も出來るだけ多く使はうとしたのが、本當は雅語といふべきもので、從うてそれにも追々の推移はあるべきであつたが、我々の間に於てはもう少し狹い意味に、卽ち京都に於て歌を詠み文章を書く人の使はうとする言葉のみを、さういふ名に呼んで尊重して居たのであつた。文學は由來保守的なもので、又屢々異常の感動を復活させる

爲に、わざと日用の語を避けて、傳統ある古語を專用しようとした傾きはあつたが、それですらも尚我々の言語藝術として存立するには、到底三馬が浮世風呂に出て來る、鴨子鳧子の如くにすることを得なかつたのである。ましてや自由の選擇が許さるゝ部面に於ては、たとへば大宮の内の言葉とても、やはり方言の普通の法則に從うて、移り改まらずには居なかつた。其選擇が大體に於て、古語をふり棄てゝ新語を迎へ入るゝに在つたことは、我々から見れば當然としか思はれないが、離れた土地に居て遠くから之を眺めた人々には、たまたま各自の選擇と同じで無かつた故に、是をさへ文學の古語を雅語とする例と、等しなみに見ようとしたのである。畢竟は音韻にせよ、古語の分化にせよ、新たなる生活の必要があればこそ、新語は世の中に現れて出たのである。人心のをのづから之に向ふのは、必ずしも無用の物ずきと評することが出來ない。私たちの想像では、個々の物いひにもやはり磨滅消耗があり、又一種の使用期限の如きものがあつた。古語は古いといふことそれ自身が、次第に役に立たなくなつて行く原因であつたかと思はれる。

この第五の事實を確かめる爲にも、蝸牛の如き方言量の豐富なる語に就いて、特に其變遷現象に注意して見る必要があるのである。都府は見様によつては亦一個の方言境界であつた。幾つか

異なつたる方言を知る者が、來つて相隣して不斷の交通をして居る。從うて市民の方言は、實は數語併存の例であつた。勿論其中にも選擇の順位はあつて、東京の蝸牛は現在はマイマイツブロ、京都ではデンデンムシが標準語の如く見られて居るが、雙方の兒童は大抵は此二つを共に知るのみならず、其上に更にカタツムリといふ今一つの語が有ることをさへ承知して居るのである。是は近頃の小學校の本に、デンデンムシムシカタツムリといふ文字がある爲であつたと、考へて居る人も少なくないが、假にさうであつても、結果には變りは無い。自分は播磨國の中央部、瀨戸内海の岸から五里ほど入つた在所に、十二三の頃まで育つた者であるが、やはりいつ覺えたか確かにこの三つの語を知つて居た。五十年前の教科書の中にも、やはり蝸牛の一節はあつたが、是は教員がクワギュウと讀ませて居た。カタツムリが古語であつて確かに倭名類聚鈔に出て居ようとも、そんなことは子供たちが知らう筈が無い。ましてや他の歌文にそれが用ゐられて居たかどうか。今だつてまだ搜して見なければよくは分らない。從うて是を記錄の影響と見ることは困難で、つまりは他の二つは使用が頻繁で無く、選擇は主としてデンデンムシに在つたといふだけで、三つの方言は共に我々の中に傳はつて居たのである。

さういふ地方は尋ねたらまだ他にもあつたことゝ思ふ。そこで問題は右の三つの名詞が、如何なる順序を追うて此世には現れたかといふことである。其中でもカタツムリだけは、既に記錄の徵證もあることだから、それが一番の兄であることは、もう疑ひが無いといふ人もあらうが、是とても京都だけの話である。他の二つが更にそれよりも前から、離れた地方に於て知られて居なかつたといふことは、今日は人が只さう思つて居るといふだけである。自分も勿論この三つの語が、相生であつたらうとは考へて居ない。併しこの國を一體として方言發生の先後を決する爲には、斯んな一部の文書史料などは、實は何の根據にもならぬのである。日本では近頃無暗に國語を外國語と比定して、是によつて上代文化の觸接を說き、あはよくば種族の親近までを、推斷しようといふ道樂が流行して居るが、それにはまづ京都以外、二三の語集以前の日本語が、今日の其通りであつたことを、立證してかゝらねばならなかつたのである。從來行はれて居た普通の方法では古い世の事は知れない方が本當である。是を確かめるには又別の手段を講じなければならなかつた。さうして私は其手段はあると信じて居るのである。

一應の觀測は、現在主として用ゐられて居るものが、稀にしか用ゐられず、若くは既に全く忘

れられて居るものよりは、新らしいと考へさせることは前にも述べた。併しそれは唯一地限りの現象であつて、現にデンデンムシとマイマイ又はマイマイツブロの如きも、關西に於ては前者が主として行はれ、東國はすべて後の者を用語にして居る上に、他には又其何れでも無いものゝみを、知り且つ用ゐて居る地方がある。だから最初に先づ分布の實狀を考察して見る必要があるわけである。私たちは必ずしも人が新語に赴くといふ傾向を高調せずとも、單に客觀的なる地方事實の比較のみに由つて、個々の方言の何時頃から、又は少なくとも一は他の一よりも後れて、此世に現れて出たことを見極め得るものと思つて居る。さういふ實驗を段々に積み重ねて行くことが、曾ては自然史の成立であつたと同じく、將來は又國語の歷史を明かにする道であらうと思つて居る。此判別の目安に供すべき尺度は、他にもまだ幾つかあるだらうが、さし當り自分の標準としたものは二つある。其一つは方言領域の集結と分散、他の一つは方言生成の理由が、今尚現存し又は比較的に明瞭であるか否かである。この第二の目安はもつと科學的な言ひ方をすれば、或は方言自體の構造素質などゝ言ひ得るかも知れないが、さういふ表現の巧拙よりも、私は寧ろ事實を詳かにして置く方に力を費した。さうして之に據つて、略デンデンムシのマイマイよりも

後に生れたことを確かめ、且つカタツムリが更に其二つよりも前であつて、しかもまだ他の幾つかの「上代の新語」を、兒として載いて居たらしきことを知つたのである。

デンデンムシの領域

他の何れの方言の支配する地域よりも、デンデンムシの領分は廣くして又續いて居る。其分布の實狀は附錄の索引と地圖とに讓つたから茲には再說せぬが、大體に於て近畿五箇國は、大和十津川の一小區劃を除いては皆それであり、北は若狹三丹に續いて日本海岸に達し、東は伊勢の海の淸き渚に出でて、一端は尾張三河の國境を堺とし美濃には入り交つて亦一つの邊境現象を呈して居るが、近江は勿論又此領內に入つて居る。西と南とは、大よそ瀨戸內海の周圍はすべて此語に統一せられ、一方は紀州の西半分と阿波一國、九州も豐前豐後の海に臨んだ平野にまで及んで居る。この廣大なる接續地域以外に、飛び散つて居る例を拾つて見ても、多くは皆近代水運の跡の、辿つて行かれる土地であつた。例へば九州でいふと肥前北松浦の大島、對馬の豐崎、奥州では氣仙の一部及び釜石附近などがそれである。日本海側では能登と越中とにも若干の分布があり

稀には又關東の村落にも其痕跡を見るが、是は上總あたりの濱から、上陸したものとも想像せられる。勿論何れも複合の形を以て存在し、又多くは數語併存の例であつた。

他の何れの蝸牛の稱呼にも、是だけ廣い領域の連續は見られぬのみならず、それが又國の中央の要地を占めて、未だ他の新たなる異名によつて、喰ひ破られて居ないといふ事實は、自分をして此方言が後にマイマイに代つて流傳したことを推定せしめた一つの理由である。方言は決して記錄文藝の如く、都を源頭として居たとばかりも言へないが、使用によつて物を古くする力は、いつの世に於ても都市は田舍よりは强かつた筈である。さうして假に近畿の人多き地方を中心として見ると、マイマイは固よりのこと、曾て源順君によつて公認せられたカタツブリまでが、今では悉く出でゝ、このデンデン領の外側に、分散し又孤立して居るのである。其他の尙若干の方言が、更に又此二つのものより外に在ることは、後段に入つてから之を說く方が便利だと思ふが、たゞ一つだけ特に此際に於て記述しなければならぬのは、デンデンに最も近いデェロ又はダイロといふ方言領である。注意すべきことはこのデェロの領域は、越中の緩衝地帶を除くの外、殆と何れの一地點に於ても前にいふデンデン領と接壤せず又混淆して居ないことである。しかも版圖

の大さに於ては、僅にマイマイの支配地を凌ぐものがあつた。越中の下新川郡、有名なる黒部川の下流は、デェロ領域の西南端である。それから北に進んで越後に親不知川近傍の小地區を除いて約全部、それから信州は五分の四以上、僅かに天龍の川下のみが、南の方から來たかと思ふマイマイに侵蝕せられて居る。甲州は單に其東北の一隅に、北武藏又は上野からの影響とおぼしきものが認められる外、大體にデェロの領分で無いが、之に反して碓氷嶺東の地は、一圓に此系統の中に入つて來る。但しこれが信州方面からの傳播であるか、或は別に又東北より進み出でたものが、偶然に再び茲に落合つたのかは問題であつて、自分は寧ろ後の場合であらうと思つて居る。其理由は稍簡單に失するけれども、奥羽地方は最上川水域の略全部、阿武隈川水域の大部分、及び會津の盆地が共に純なるダイロウの形を保持し、又關東に入つても、是と地續きなる栃木縣北半だけは同樣であるのに、それが南して常陸に臨み、西して群馬縣の平野に降るに及んで、そこに最も顯著なる邊境現象、即ち變化と複合と數語併存と、色々の事例が見出されるからである。

併し此問題は今はまだ容易に論斷を下し得ない。それよりも以前に知らなければならぬことは方言領域の擴張退縮が、如何なる力によつて行はれたかといふことゝ、其力は主としてどの方面

から働きかけられて居たかといふこと、別の語でいふならば、言語も他の種々の文化と同じやうに、新たに流れて出る源頭の如きものがあつたか否かである。日本は此問題を調べて見る爲に、實は比較的都合のよい國であつた。他の大陸の接壤諸國に比べると、外から入つて來た感化が尋ね易いのみならず、事實又其感化が甚だしく少なかつた。中世以後の新しい單語なども、其入口は何れの港であらうとも、一應は先づ京都人の選擇を經て居るのである。從うて蝸牛の次々の改稱の如きも、別に地方に獨立の中心は、無かつたものと見るべきであるが、偶然にもこのダイロウ又はデェロの一語のみは、全く中央と交渉無しに、流傳し侵略したかの如く見える。此點が自分の最初の疑惑であつた。ところが仔細に觀察をして見ると、茲にも一種の邊境現象、即ち大規模なる複合作用が、新たに採用せられる語辭の上に行はれて居たのであつた。それを此場合にあてはめて言へば、デンデンムシは東部の諸國に進出するにつれて、やがてダイロウとなるべき傾向を具へて居たのであつた。從うてこの東西二つの方言領域は、たとへば羅馬が二つの帝國となり、又は足利氏が京鎌倉に立ち分れたやうに、其全體の外に立つものから見れば、依然として合同の一新勢力であつた。是が恐らくは此二つの方言の間に、相互の交渉が殆ど無かつたこと、及

び其割れ目の中間に、以前の方言の一種二種が、永く存立し得た理由では無かつたかと思ふ。

童詞と新語發生

デエロは西國のデエデエと同じく、元は確かに「出づる」といふ動詞の、命令形であつたらうと思ふが、現在はそれを疑はしめるやうな若干の事實が既に生じて居る。第一には話す人に其語の由來を知らぬ者が多くなり、從うて之を少しづゝ、變へようとする試みが行はれて來た。越後信州の大部分では、ディロ・ダイロの二つが共に報告せられ、上州に於ても利根吾妻の一部はディロ、福島縣でも相馬郡、南會津の朝日村などはデーロであるが、他の多くの地方の方言集にはダイロ又はディァイロと報じて居る。一つには長音法の不完全もあらうが、大體に於てダイはデイよりも正しいと考へるダイコン(大根)流の匡正主義が働いて居るので、人が特別に注意を拂はなかつたならば、末には追々に此方に統一せられたかも知れぬ。現在知られて居るデーロ領の飛地としては、但馬國には水路を運ばれたかと思ふダイロウがあり、但馬まで、遠くは海を隔てた對馬島の一隅にも、亦ダイリヨウといふ語が發見せられる。此等は何れも既に「出る」の意味を、知らない人々

によつて傳へられたので、斯ういふ單なる模倣こそは、往々にして又訛語の原因にもなつて居るので、方言其ものゝ成立ちを考へて見るには、是は寧ろ警戒しなければならぬ材料であつた。それとよく似た例ならば、デェデェの方にも幾つかある。たとへば雲州の松江附近のダイダイムシなども其一つで、恐らくは亦何故にデェデェといふかを忘れて居る人々が、たゞ一般の正しい音に附いて、是をもダイダイに言ひ改めようとした迄であつたらうと思ふ。デンデンムシといふ語なども、實はもう最初の形では無いのだが、之に比べると遙かに弘い區域を持つて居るわけは、今尙其背後に一つの力、卽ち其語を發生せしめたる元の理由の、殘つて居るものがあるからであつた。單語の符號化といふことは、在來の使用者のみには何でも無い事のやうであるが、それを一の土地から他の土地に移さうとする場合には、可なり大きな障碍となつて現れる。新語の動機のまだ明かに知られて居るものには、根を引いて植ゑかへるやうな味得があるに反して、此方はたゞ枝を折つて手に持つだけの模倣しか無いからであらうと思ふ。個々の事物によつて方言量に多少があり、個々の方言に領域の廣狹があるといふことは、恐らくはこの符號化の遲速、もしくは之を防止すべき外部の力の、有無强弱によるものであつて、言語を一種の社會史料として利用

せんとする者には、殊に此關係を明確にして置く必要があるのである。

私の假定がもし當つて居るならば、現在一つの方言の活躍を支持し、殊に其流傳を容易ならしめて居る力は、同時に又其語の新生を促した力でもあつた。だから一方の原因が不明になる頃には、他の一方の效果も弱つて、後には只曾て是を育てた人の群に、符號と化して殘る以外には、至つて僅少なる模倣者を得るに止まり、何かの機會ある毎に、新らしいものに代らるゝ運命をもつのである。是を單語の生老病死と名くることは、必ずしも不倫とは言ふことが出來ぬ。固より其間には壽命の長短があつて、古語にも往々にして今も活き、成長し又征服しつゝあるものもあることは事實だが、大體からいふと古いものは失せ易く、後に生れたものゝ迎へられるのは常の法則である故に、我々は若干の例外のあるべきことを心に置いて、略現在の方言領域から、それ〴〵の語の年齡長幼を推知することを許されるのである。

或はこの新陳代謝の狀態を以て、簡單に流行と言つてしまへばよいと思ふ人もあるか知らぬが、それには二つの理由があつて、自分たちは從ふことが出來ない。「流行」は社會學上の用語として今尚あまりにも不精確な内容しか有たぬこと是が一つ、二つには新語の採擇には、單にそれが新

しいからといふ以上に、遙かに具體的なる理由が、幾つでも想像し得られるからである。たとへば語音が當節の若き人々に、特に愛好せられるものであり、もしくは鮮明なる聯想があつて、記憶通意に便であるなども一つの場合であるが、更に命名の動機に意匠があり、聽く者をして容易に觀察の奇拔と、表現の技巧を承認せしめるものに至つては、其效果はちやうど他の複雜なる諸種の文藝の、世に行はるゝと異なるところは無い。一方には又其第一次の使用者等が、屢々試みてたゞ稀にしか成功しなかつた點も、頗る近世の詩歌誹諧秀句謎々などゝよく似て居て、今でも其作品から溯つて、それが人を動かし得た理由を察し得るのであるが、しかも唯一つの相異は其作者の個人で無く、最初から一つの群であつたことである。曾て民間文藝の成長した經路を考へて見た人ならば、此點は決して諒解に難くないであらう。獨り方言の發明のみと言はず、歌でも唱へ言でもはた諺でも、假令始めて口にする者は或一人であらうとも、其以前に既にさう言はなければならぬ氣運は、群の中に醸されて居たので、たゞ其中の最も鋭敏なる者が、衆意を代表して出口の役を勤めた迄であつた。それ故にいつも確かなる起りは不明であり、又出來るや否や兎に角に直ぐに一部の用語となるのであつた。隱語や綽名は常に斯くの如くして現れた。各地の新

方言の取捨選擇も、恐らくは亦是と同様なる支持者を持つて居たことであらう。一つの群衆の承認は積極的のものである。單に癖とか惰性とかいふやうな、見のがし聞きのがしとは一つで無い。それを自分が差別して、此方を新語の成長力など丶名けんとして居るのである。

出來るものならば此狀態が、決して近代に始まつたもので無いこと、否寧ろ以前の簡單な社會に於て、殊に盛んであつたことを私は立證して見たい。言葉を新たに作る群は、今でも氣を付けて見ると少しはある。一つの山小屋や遠洋漁船の中で、共に働いて居る者の中には仲間の語が出來る。香具師や芝居者の職業團に發生したものなどは、素より外間に通用することを回避するものであつたが、それすらも折がある毎に普通語に化して居る。此頃でいふならば學者語・篤志士語、以前の世の中では說教僧の經典語なども、誰が學んだものか知らぬ間に俗語になり切つて居る。まして境涯の全く相似たるものが、互ひに興ある隣の新語を、知れば用ゐようとするは自然の勢ひである。たゞ障碍は寧ろそれよりも根源に在つて、現在の人の集まりが稍疎で結合の力弱く、殊に興味の統一集注を求め難い爲に、一人の奇警なる言葉が是を苗圃として中折することを得なかつたゞけである。

私は前にチギリコッコ考其他二三の論文に於て、小兒が新語の製作者であつた顯著なる事例を擧證して居る。考へて見ると是が特に目に立つに至つたのは、他には同一の條件を具足したものが、次第に稀になつて來た結果であつて、必ずしも現代の日本語が、悉く恩を幼き者に負ふといふことを意味しなかつたのである。しかも我々が眼前の事實を基礎として、國語の是までの成長を考察しようといふには、やはりこの手近の例を援用する他は無いのであつて、後にはたゞ是と同じき推定が、更に前期の年長者たちの群にも、擴張し得るか否かを檢すればよからうと思ふ。

少年青年は其作業の組織が、今も昔に比べて甚だしく變化して居ない。さうして其共同の利害が單に地域によつて制限せられるのみで、部外にも同質の共鳴者を持つて居ることは、曾て個々の盆地を耕作して居た農夫群、もしくは長汀曲浦の一つ／＼に村をなして、手結び網曳した漁夫群などとよく似て居る。新語の發明又は選擇が、遷傳して行くべき軌道には、是に上越すものは無かつたわけである。蝸牛には限らず、自然の小さな産物の中には、全國の童兒が各地等しく其心を傾けたものは多かつた。蒲公英の花を弄ぶ遊戲は、日本に大よそ四つあれば、その名稱も亦四つある。土筆を手に取つていふ唱へ言が五つあれば、其地方名も大略之を五系統にわけられる。

たゞ其章句があまりに單純で、今は忘れてしまつた土地が多い爲に、まだ此兩者の關係を確實にすることが出來なかつたゞけである。ところが幸ひにして蝸牛の歌は殘つて居る。それと現在の名稱とに、誰が見ても縁が無いとは言へぬのである。しかも此歌の起りは年久しく、既にマァチネンゴ伯夫人が、其民謠論の序文に述べて居る樣に、「デデムシ出よ／＼」といふ童詞は世界の諸國、英蘭・蘇格蘭・獨逸・佛蘭西・トスカナ・羅馬尼亞・露西亞及び支那等の童兒にまで、一樣に高く唱へられて居たのであつた。

二種の蝸牛の唄

京都のデデムシの人に知られて居たのは、延寶四年の序文ある日次記事よりは後で無かつた。同書四月の末の條に、

自二此月一至二五月一、有二霖雨一則蝸牛多出、或登レ床又黏レ壁、……其在レ貝也則頭角不レ見、童相聚、出出蟲蟲、不レ出則打二破釜一云爾。此蟲貝、俗稱レ釜、

とあるのは、デデムシの名の此童詞から出たことを知つて居たのである。しかも夫木和歌抄には

土御門天皇の御製として、

家を出でぬ心は同じかつたぶりたゝ舞ふべくもあらぬ世なれど

といふ一首を載せて居るのを見ると、出よ／＼といふ意味の童詞の方は前からあつて、その或時代の面白かつた詞の形が、後にデェデェムシといふ新名詞を、發生せしめたことを想像し得られるのである。

實際此童詞は土地によつて、今でもどし／＼と其形を變へて行かうとして居る。各地幾つかの例を引き比べて見ても、もはや目次記事にある樣な「釜を割るぞ」といふ威迫は用ゐられて居ない。「出ろ」といふ趣意だけは一つであつても、文句は如何樣にも取替へられるものであつた。しかも其文句が一般の人望を博すると、やがて蝸牛の又一つの方言が出來たことは、恐らくは亦黒川道祐時代の、デェデェムシムシをも說明するものであらう。近代は大體にデンデンムシといふ地方が多くなつて居るが、是はデデの命令形なることに心付かず、口拍子にデンデンと謂つた子が多かつた結果かと思はれる。たとへば播州では印南郡などに、

でんでん蟲出やれ、出な尻にやいとすよ

といふ歌があり、紀州では田邊附近に、

でんでん蟲蟲、出にや尻つめろ

といふ歌があつて、乃ち此兩地の蝸牛はデンデンムシであつた。備前では邑久郡朝日村に、

でん〳〵でんの蟲、出んと尻うつきるぞ

といふ童詞があつて、此邊では又デンノムシとも呼んで居るらしい。伊勢は南北ともに今でも

でんでこない出やつせ

太鼓のぶたと替へてやろ

などゝいふ章句が行はれて、乃ち亦デンデェナイ（三重郡）又はデェナー（一志、飯南郡）等の方言があつた。多分は或時代に「なぜ出て來ない」と唱へたこともあつた名殘であらう。其他大垣周圍のデェデラムシ、四國其他二三の地方のデノムシ或はデゾシなども、おそらくは是に相應した歌の節が、やゝ久しく行はれて居た爲に、所謂誰言ふと無く其名になつたものと思ふ。

實際は歌詞の採用と、名稱の選定とは別々の行爲であつた。前者の變化の方が遙かに頻繁であつて、名詞は必ずしも毎回是に追隨して居ない。あんまり小さい事で人は注意して居らぬかも知

らぬが、童兒が蝸牛に向つていふ文句には、實は早くから二通りの別があつた。出るといふ一點は同じであつても、一つは其身を殼から出せといふもの、他の一つは卽ち槍を出せ角を出せといふもので、あの珍らしい二つの棒を振りまはすのに興じたものであつた。子供としては此方が觀察が細かいのであつたが、どういふものか歌の數の多い割に、方言の上には影響が少ないのであつた。前に「尻つめろ」の例を擧げた紀州田邊でも、神子濱の方にはその「角出せ槍出せ」の歌があつて、名稱はやはりデンデン蟲蟲であり、備前でも兒島郡の方には、

でん／＼でんの蟲
角出せはやせ
早島の土手で
簑と笠と換へてやろ

といふ注意すべき文句があつて（鄕土研究一卷十號）、しかも方言はデンノムシである。能登の鹿島郡には村によつて一樣ならず、

でん／＼がらぼ

　ちやつと出て見され
　わがうちや燒ける

と欺いて全身を出させようとするのと、

　つのらいもうらい
　角を出さねばかつつぶす

など〻、單に角だけを要求するものとあつて（石川縣鹿島郡等）、デンデンガラボもツノダイーツブイも、共にそれ〴〵の地の方言になつて居るらしいが、關東平野のマイマイツブリ領域などは、殆ど一樣に蝸牛の名稱とは關係無しに、この「角出せ」の歌の方を唱へて居るのである。

是は或は詞章の有力なる外部感化以外に、別に方言發生の機會若くは必要ともいふべきものがあつたこと、又或は言語が固定して早晩符號化する傾向をもつことを語るものかも知れぬが、それはまだ自分には決し難いから、茲にはたゞ事實のみを擧げて置くのである。ダイロウ又はデーロの領域に於ても、やはり今行はるゝ童詞は、大抵は角を出せの方であつた。例へば信州では下水内郡に、

だいろ〳〵、角出せ、だいろ〳〵

といふ童詞があり、同小縣郡などでは

だいろ〳〵つのう出せ
角う出さなけりや
向山へもつていつて
首ちよんぎる〳〵

といふのがある。甲州では東山梨郡の一隅に、蝸牛をダイロといふ地域があつて、

だいろ〳〵角出せ
角を出さぬと代官所に願ふぞ

といひ、越後でも中魚沼郡では、

だいろう〳〵角を出せ
にしが出せばをれも出す

などゝ謂つて居る。福島縣の磐瀬郡では何と唱へて居たか知らぬが、現在ダイロウといふ語を一括

絶するといふ意味に使ふさうで、それは蝸牛の唄から出たと、郡誌にも解說して居るのである。「出る」といふ動詞の東國風の命令形が、後にダイロと化して元を忘れらるゝに至つたのも、一つの原因は是に在るのであらうが、歌に基づいて曾て出來た新語が、歌よりも遲くれて後に殘る例は、固より是ばかりでは無かつたのである。

私の推定がもし誤つて居らぬならば、今日最も弘く行はるゝ「角出せ」の章詞に、假に他の條件さへ具備すれば、又此次の蝸牛の方言となるべきものであつた。さうして實際又其兆候は處々に見られるので、たゞ今日の標準語全盛の下に、遠く境外の地を征略し得られぬだけである。一例をいふと青森縣の三戸郡誌には、あの地方の蝸牛の歌が幾つか出て居る。八戸市及び斗川村では

つのだし／＼
角う出さながら
んがいつこ(汝が家)ぶつこわす／＼

といひ、或は又

つのだし／＼

角う出さながら
大家どんさことわる〳〵

とも謂ひ、又は單に

角出し〳〵
つの出せ、やり出せ

といふのもあつて、此地方の蝸牛の方言は乃ちツノダシである。ツノダシは略此縣一圓に行はれ、五戸では又ツノダイシとも謂つて居る。津輕其他の土地には、別にツノベコといふ語も併存する。ツノベコは卽ち角牛といふことで、是は飛び離れて福島縣東南の海岸から、茨城縣北境にかけて行はれて居る。茲では簡單にベコともいふのだが、それが若し「角出せ」の歌を唱ふれば、此語の成立つことも至つて容易であつたのである。

それから今一箇處は石川縣の中央部、加賀の石川郡などにもツノダシの領分がある。越中に入るとそれが復合して、

ツノダシミーミョ　　　東礪波郡野尻村

ツノツノミョミョ　　同郡井ノ口村
ミヽミヽツノダセ　　同郡出町附近
カヱカヱツノダヽ　　氷見郡宇波村
ミヽミヽツノダシ　　中新川郡上市町

などゝなつて居るが、何れも皆土地に行はれて居た童詞の第一句を、其まゝ呼びかけられる相手の名と、心得てしまつた結果かと思ふ。千葉縣の東葛飾郡などは、マイマイ領域のまん中であるが、やはりボーダシといふ一語が併存して居る。ツノといふだけの語を添へた例ならば、他にもまだ方々にあるらしい。美濃の東部などは、後に言はんと欲するツブラ領の飛地であるが、よそにも山縣郡ではツンツンといふ一語がある。是も何何の歌がなかつたならば、單なるツブラだけからは此異稱は導かれなかつたらう。

最後に今一つの注意すべき例は、前にダイロ領域の一つの終端であらうと述べた、上野と武藏北部との邊境現象である。

ツンノデエロ　　上野群馬郡

ツンノンデエショ　同郡總社町
ツノンダイロ　同國館林附近
ツノンデエロ　武藏妻沼町
ツノンデエロ　同　禮羽町
ツノンダエショ　同大里郡八基村
ツノンダイシロ、メエメエズ　同入間郡

卽ち此區域の北境はダイロ、南はマイマイの領地であつて、別にツノダシの語の行はれて居る地方は無いが、尚ほ角出せの童詞の影響を受けて、純然たるダイロに服從することが出來なかつたのである。それ故に私は、若し今日の如き意識的統一の風が起らなかつたら、デンデンムシに嗣いで覇を唱ふべき方言は、或はこのツノダシでは無かつたらうかと思ふのである。

方言轉訛の誘因

地方語調査事業の學問上の價値が、今まで輕視せられて居た大なる理由は、それが無識と誤解

と模倣の失敗とのみによつて、鄙縣に中央の正しい物言ひから離れて行つたかの如く、我々も久しく思ひ込んで居たことであつたが、それは到底立證することの出來ない、甚だ不當なる臆斷であつた。小兒の片言のやうな生理學上の理由があるものでも、「匡正」の必要があるものは打棄てゝ置いても自分で匡正する。外國語を學ばうとする者は、今までも持ち合せぬ語音をすらも發しようと試みる。ましてや豫て自分たちに具はつた音韻を以て、自由に知つて居る語を選擇する場合に、其似ようとして誤つた語に落ちて行く道理が無い。要するに是は眞似なかつたのである。さうして我が居る各自の群のうちに、通用することを目途としたのであつた。唯前代の群は概ね小さく、又相互の交通は完全でなかつた故に、暫らくの隔離の間に、時として意外な變化を出現せしめるやうな餘地が、今よりは遙かに多かつたゞけである。音韻の改定は文章音樂の盛んであつた地域に、寧ろ頻々として行はれて居た筈である。故に若し古きに復することが即ち正しきに返す道であるならば、邊部の語音こそは却つて心を留め耳を傾くべきものであつたかも知れない。唯今日の實狀に於ては、その地方差は既に複雜を極め、人は中央との往來によつて、次第に自ら法則の煩はしさに惓んで、進んで一つの簡明なるものによつて、統一せられんことを欲して居るのである。所

謂標準語の運動の、單に便宜主義のものなることを思はねばならぬ。それと國語史の研究とは、全然無關係なる二つの事柄であり、而うして後者の更に重要なる根本の智慮を供給するものなることは、事新らしく論ずるまでも無いのである。

微々たる一個の蝸牛の名稱からでも、若し我々が觀察の勞を厭はなかつたならば、尚國語の地方的變化の、由つて起るべかりし根柢を見つけ出すことが出來る。それを一言でいふならば古きを新たにせんとする心持、卽ち國語の時代的變化を誘うた力が、個々の小さな群や集落に於ても、割據して又働いて居たことである。或は若干の空想を加味すれば、言語も亦他の人間の器械什具と同じやうに、一定の使用回數を過ぎると、次第に鈍り且つ不精確になるものであつたと言ふことが出來るかも知らぬ。さうして兒童の群は又花柳界など丶同じく、殊に短期間に言語使用度の激しい群であつた。それ故に一旦彼等の管轄に委ねられた言語は、物々しい法廷敎壇等の辭令に比して、一層迅速なる代謝を見たのかとも思はれる。實例の三四を順序立てゝ擧げて見ると、千葉縣では海上郡の一部分に、蝸牛の名をヲバヲバといふ方言があるが、それは疑ひも無く次の蝸牛童詞から出たものであつた（海上郡誌二六八頁）。

でば〳〵
でばらゞ家が焼けるから
棒もつて出て來い
槍もつて出て來い

ところがこの伯母の家の出火なるものは、往々蝸牛を誘ひ出さうとする策略として、他の府縣の小兒にも用ゐられて居る口實であつた。獨り蝸牛ばかりで無く、夕方空を通る鳥なども、屢々この報告を以て欺かれんとして居たことは、以前人間が伯母の家を大切にし、何はさし置いても其災厄を救援した名殘とも考へられる。察するところ是も前には今一句デイデイツブロを呼びかける語があつたのを、後には伯母々々を先づ唱へた爲に、それが蝸牛の名である如くに、解する者を生じたのが元であらう。實際又此地方で、ヲバといふのは次女三女などの、若い娘のことであつた。それ故に蝸牛をヲバヲバといふことが、殊にをかしく感じられたのである。

次には山梨縣の北巨摩郡、古來逸見筋と稱する一小區域に、蝸牛をデットーと呼ぶ方言が行はれて居る。他には一つも類例の無い語で、一見する所殆ど其由來を知るに苦しむが、是も一種の

人ならば簡單に說明し得ることゝ思はれる。卽ち是を又チットウバットウとも謂ふ者のあるのを見れば、玆には蝸牛の童詞に「爺と婆と」といふ始の句を有つものがあつて、それを直ちに此蟲の名にして居たらしいのである。爺婆の名を以て知らるゝ物で、最も有名なるは春蘭の花がある。それから土筆や菫などにも、或は此名があつたかと思ふが、大抵は兩々相對するものに向つていふ戲れの言葉であつた。逸見筋の蝸牛の歌はまだ聞いては見ないが、多分あの二つの角を出したり引込めたりすることが、それに近い文句を唱へさせて居たものと思ふ。

方言は大よそ此の如く、もとは少しも世間を構はずに、入用なる群ばかりで作り出して居たものであつた。それが面白ければ第二の土地に採擇せられ、次々に彼等の元からもつものを棄てさせたのであつたが、成功しなかつた例は勿論非常に多かつた。しかも其發生地に在つて當座の力をもつことは、堂々たる儀禮公事の語も異なる所はない。それを悉く本貫より携へ來り、乃至は中央から勸請したもの如く、考へてかゝるのは無理であつた。是も千葉縣であるが海上郡などの一部に、蝸牛をタツポと謂つて居る土地がある。タツポは本來田螺のことであるから、是を樹上の貝類に付與することは、甚だしき無智又は錯誤とも評し得られる。併し徐ろにさうなつて來

た順序を考へて見ると、是は兒童がマイマイツブロの歌を、いつの頃よりか[illegible]歌ひ改めて居た結果であつて、其證據には現にさういふ文句もある地方に行はれて居り、又山武郡では蝸牛をメヽメヽタッポと呼ぶ方言も採集せられて居る。さうして實際又蝸牛は[illegible]あるタッポに相違なかつたのである。それよりも尚弘い地域に亙つての變化は、利根川水域の南に左岸一帶に於て、蝸牛をメエボロと呼び習はす方言である。是も如何にして斯る語が生れたかは、土地に行はれて居る童言葉を、聽いたばかりでも直ぐに諒解し得る。常陸新治郡の蝸牛の唄には、

まい〱つぼろ
小田山燒けるから
角出して見せろ

といふのがあるさうだが（郷土研究二卷三卷）、是は小田山の附近に住む子供だけらしく、それから南の他の村々では、大抵は「伯母とこ燒けるから」と言つて居る。さうして其「まい〱つぼろ」を、しやれて又「めいぼろつぼろ」と、唱へる者も多かつたのである。自分は今から四十年ほど前に、

久しくあの地方に住んで居た者だが、其頃の記憶でも「めいぼろつぼろ」と言つた者と「めいめいつぼろ」と言つた者とが兩方あつて、殆ど一人一人の考へ次第のやうなものであつた。從つてかの蟲をマイマイツブロと呼ぶ方言も無論通用したが、大勢は當時既にメエボロの方に傾いて居た。多分は此方ならば只四言で間に合つたといふことが、珍しい又氣が利いて居たのであらう。茨城縣方言集覽・稻敷郡方言集、其他かの方面の採集書を比較して見ると、案外にこの變化の行はれた區域は弘く、しかもそれが一地毎に少しづゝ違つて居るのであつた。

メメチヤブロ	下總東葛飾郡
メエボロツボロ、メエボロ等	同北相馬郡、常陸稻敷郡
マエボチツボロ、ミーボロ等	常陸稻敷郡
マイマイツボロ、マイボロ	同　久慈郡
ネエボロ、ナイボロ等	同　眞壁郡、下總結城郡
ナイボロ、ダイボロ	下總猿島郡
ネアーボロツボロ	下野芳賀郡一部

ダイボロ、デエボロ　　同郡及河內郡一部

この最後の二つの郡は、北と西との兩面に於て、前に述べたるダイロの領域と接して居る故に、爰に始めてダイボロといふが如き、中間の形を發生せしめたのみならず、更に他の一方にはそれとマイボロ地方との觸接面に、ナイボロ、ネエボロといふ變化をさへ引起して居るのである。俚謠集拾遺には又栃木縣の童詞として、

えーぼろつぼろ
角出して見せぬと
膀くそぐつと

といふ一章を載せて居る。何れの村かは知らぬが、又エーボロといふ例もあつたのである。私が是を方言の邊境現象と名けた、用語の當不當は別として、少なくとも個々の田舍の一つの方言を抜き出して、轉訛の問題を論ずることの出來ぬだけは、是でもはや明白になつたことゝ思ふ。

マイマイ領域

自分はマイマイツブロがカタツブリも同様に、古く二種の方言の接境地に於て、複合したものだといふことを說きたいのであるが、其以前に先づ此系統に屬する一單語が、曾てどれだけ弘い版圖を持つて居たものかを、考へて置く必要があるやうに思ふ。現在の所では、マイマイが一續きの領土を占めて居る區域は、デエロ・デエデエに比べると遙かに小さい、關東八州は前にも言ふ如く、既に著しい混淆雜揉がある上に、北の山地に屬する約四分の一は、もうダイロ其他の方言に支配せられて居る。相模にも一小部分の他領があるといふが、それはどの邊であるか三浦郡以外はまだ確かめて居ない。箱根以西の東海道は伊豆の一角を除き、先づ大體に愛知縣の中央、即ち尾張と三河との境までが、其區域であつたと言ひ得る。是から言ふと今日の標準語なるものは、言はゞ新しい帝都の榮ゆる土地が、偶然にこのマイマイ區域の內であり、しかもその邊境現象の起るべき東部の一隅であつた結果、次第に其複合型たるマイマイツブロに、歸一することになつたのである。記錄文籍を極端に崇敬した時代に、カタツブリが優越の地位を占めたる事情も、或は亦是とよく似たものであつたかも知れぬ。

但しマイマイといふ方言の領分が、以前も今の如く狹い小さなものであつたといふことは、推

斷し難いといふよりも、寧ろ反對の證據がある。關東以北に於ては、陸前の遠田郡にメンメン、若くはメンメンダバゴロといふ注意すべき一つの異例ある外は、東南部に僅かな痕跡が殘って居るだけであるが、其他の方面殊に京都以西の諸縣では、中間はデデムシ系統の方言によって隔てられつゝ、飛地が斷續して九州の北半にまで及んで居る。其分布の實状はまだ詳かにし得ないが、次に列記する土地と土地との間にも、尚幾つかの失はれたる鏈鎖が、後には發見せられることだけは想像してよからう。

マイマイカタツボ	伊勢相可
マイマイ、デゴナ	同宇治山田市
マイマイグヅクヅ	同度會郡一部
マイマイ	志摩磯部
ママデ	紀州熊野阿多和村
マイマイ	丹波船井郡和知
マイマイ	美作苫田郡

ツノミャアミャア	同勝田郡北和氣村
ミャアミャアキンゴ	同眞庭郡富原村
ミャアミャア	備中吉備郡日美村
ミャアミャアコ	同小田郡金浦町
マイマイ	備後沼隈郡
マイマイコツブリ	筑前戸畑
マイマイ	同宗像郡
マイマイ、ゼンマイ	同博多邊
メエメエツングラメ	肥前佐賀市
マメツングリ	筑後三潴郡
マイマイ	同吉井邊(兒語)
メエメエツブロ	豐後日田郡(下流)

中國の西部、殊に山口縣内の言語現象は、今日まだ甚だしく不明であるが、此地方にも全然斯

いふ土地が無いものとは思はれない。又現に確かにあると言ふ人もある。此等の實例は數に於て決して豐富では無いけれども、兎に角に四部の全く異なつた方言の中に聞かれて、是だけ分散して居るといふことは、平凡なる事實では無いと思ふ。この說明は恐らく一つしか有り得まい。卽ち曾て一樣にマイマイの語の行はれて居たところへ、後に今一層有力なる語が入つて來て、その大部分を侵食したものと、見るより他は無いのである。

しかも其マイマイが行はれて居た期間も、相應に久しいものであつたといふことが想像せられるのは、當初命名の動機が全く忘れられて、語音に幾段にも轉訛して行かうとした形跡が見えるからである。獨り下總常陸のメヱボロの如く、略明白に其歷史の辿らるゝもののみでは無く、例へば山陰道の一側面に於ては、早くも次のやうな變化が出現して、單に各個の例によるときは、是をマイマイの同類と認めることが、果して正しいか否かを疑ふまでになつて居る。

マアヨ　因幡各郡
マアメ　伯耆東伯郡北谷
メエダセ　同　境港附近

モオロモロ、モンモロ　出雲の一部

モオモリ　同　今市邊

モイモイ、モオイ　石見銀山附近

併し此等の方言は何れも皆、現に「角出せ」式の童言葉から出て居るのであつて、從うて成人ばかりの切り口上の用語よりは、早く崩れたり變つたりしたのであつた。

遙か懸離れた甲州北都留郡の山村にも、蝸牛をモモウズといふ方言があつた。勿論兩者の間に直接の連絡があるとは見られないが、マイマイの歌言葉は往々にして、斯うも變つて行く傾向は有つて居たのである。其例證として援用し得るのは、北陸道各地の音異同である。能登や越中には一方にはまだマイマイに近い語も殘つて居るに拘らず、村によつては早之をミーウに近い音に換へて居る。是も幼ない者の仕業であらうとは思ふが、虹のミヨウジに就いても我々が心付いた如く、全體に此方面はヨーといふ音の豐かな地方であつた。

マエマエ　越中氷見郡神代村

メンミンガラモ　能登鹿島郡一部

ミヨミヨツノ　同郡能登島
メンメンカエブツ　越中高岡市邊
メンメンカエボ　同中新川郡大岩村
ミコミヨツノダセ　同東礪波郡出町邊
ミヨウミヨウ　加賀の一部
ミヨウゴ　同能美郡
オツシヤビヨウビヨウ　越前の一部
ニヨウニヨウ　越後新發田附近

これ等も皆其周圍の地とは特立して、今に此樣な異彩を放つて居るので、變化に當つて相互の提携が斷ち切られて、各自異種の間に孤存しなければならなかつた結果とも見られるものである。

その種々なる複合形

方言は乃ち右の如き場合に於て、單なる消滅以外にも、尚色々の變化を受けなければならなかつた。

つたのであらう。前掲の諸表を見渡しても知れるやうに、曾て全國に亙つて案外に廣い領土を持つて居たらうと想像せられるのは、たゞ單純なるマイマイの形としてゞあつて、それが童兒の唱へごとに適した、七言又は五言の長い名となる頃には、必ず地方によつて思ひ〳〵の變化を見て居る。二三の例外のまだ解說し難いものはあるが、大體に於てマイマイツブロは、關東も主として東京灣の四周にのみ行はれて居る。其中でも殊に上總下總の間に、此種の複合の多く行はれて居るのを見ると、或は此方面の今一つ以前の語が、ツブロであつた爲かとも推測せられるのである。陸前の遠田郡などでメンメンダバゴロ、九州では筑後三潴郡に於てマメツンゲリ、肥前の佐賀でメエメエツングラメといふことは、何よりも有力なる一箇の旁證である。なぜかといへば蝸牛の方言が、仙臺領に於てはタマクラ又はタンバクラであり、九州は又弘くツグラメである故に、それとマイマイとが結托すれば、當然に此語を作るべきだからである。私は最初德川氏が東國移封に際して、多くの文物を其鄕里から持込んだことより類推して、此マイマイツブロも亦一種の三河屋では無いかと思つて居た。併し立戻つて本國の實狀を檢めて見ると、彼地には寧ろ是と近いものが無かつたのである。三河では海上尾張と交通の多い日間賀島に、越中とよく似たメイメ

イッソといふ語がある。又天龍川を登りに信州の下伊那郡に入つて行くと、爰ではマイマヒと結合してマンマンダイロ、若くはママダイロといふ方言も發生して居るのである。

それから今一つ、是は何れの側面からの刺戟でも無く、殆と獨立して出來たかと思ふメエメエコンジョ、若くはメエメエクンジョウといふ一語がある。それが東三河の寶飯八名等の諸郡に行はれ、北して設樂に入ると、早くもメメクジとつまつて、甚だしく蛞蝓の名と近くなつて居るのは、又一つの新らしい暗示である。我々は他日或は此事例の精細なる考察によつて、個々の單語の力の補充、卽ち當初其語を作り出した動機が不明になつて後に、更に別方面から新たなる支持者を見付け出さうとする、社會的傾向を立證し得るかも知れない。果してさういふ傾向があるものとすれば、是は國語史學の可なり大切なる問題であつて、效果は獨り所謂民間語原說の、由來を明かにするのみでは無いのである。蝸牛を右に近い語で呼ぶ例は、東京の近くにも亦偶然に一處あつた。武藏の山村から甲州にかけては、蝸牛の方言はマイマイツブロでは無かつた。入間郡の一部にはメエメエズ、北多摩郡大和村はメェメェズ、西多摩郡氷川ではマイモズ、それが甲府の周圍に行くとメンメンジョウとなり、其中間には前に擧げた北都留郡のモモウズを生じ、稍遠

び離れた下野の上都賀郡にも、マメジッコといふ語を殘して居るのであるが、丁度さういふ例ばかりで取圍まれた中に、孤立して又一つのメエメエコウジがある。村岡良弼氏の下總方言一斑の中に、相模では蝸牛をメメクジと謂ふとあるのは、多分亦之を指したのであらうと思ふが、馬入川左岸の津久井の山村に於ては、今でも實際「めえめえこうじ、やあこうじ、角を出せ槍を出せ云々」といふ童詞が行はれて居るのである（相州内郷村話）。さうして是と同じ種類の章句は、又三河の寶飯郡にもあり、西は名古屋の市中に於ても、近年の流行かは知れぬが、やはり採集せられて居るのである（俚謠集拾遺）。

　めえめえこんしよ角う出せ
　粉糠三升やらあに

此歌の文言を見れば、コウジもクンジョも共に小牛のつもりであつたことは、もう疑ひが無いのである。蝸牛は常陸の多賀郡でベコ、石城も津輕も共にツノベコといふ名を用ゐて居るのみならず、支那の蝸牛といふ語が亦既に渦紋ある牛の義であつた。二つの角を振りまはす貝蟲を、牛に譬へるといふことは小兒の自然で、少しも異とするに足らぬやうなものだが、私は尚一つ以前の誘因

が無かつたならば、特に之を「小牛」と呼ぶやうな、地方的の變化は起らなかつたのでは無いかと思つて居る。然らばこの相州と三河と、二地に偶發した變化の共通の誘因は何であつたか。是は蝸牛をもナメクジと呼んだ、又一つの方言が曾てあつたといふことから、説明してかゝるより他は無いのである。

蛞蝓と蝸牛

蝸牛の方言の新たに發達して居る土地の人には、是は或は意外な事實かも知らぬが、蛞蝓と蝸牛とが名を一つにして居ることは、決して珍らしい例でも何でも無いのである。先づ九州では肥前肥後筑後の各地、壹岐の島でも蝸牛のナメクジがあり、日向の島野浦でも雙方ともナメクジである。併し是では何れか一方のみを、特に珍重する者には不便である故に、やはり分化の法則に從うて、追々に其別を設けようとしたことは事實であつて、乃ち肥前の諫早に於ては、蝸牛をツウノアルナメクジと謂ひ、肥後の玉名郡では約してツウナメクジと謂つて居る。ツウは明らかにツブラの變化であるが、今は一般に甲良、若くは「かさぶた」といふやうな意味に解せられて居る

らしい。肥後でも熊本以南、宇土八代球磨の諸郡では、蝸牛のナメクジは其儘にして置いて、却つて蛞蝓の方をばハダカナメクジと謂ふことになつて居る。

國の他の一端にも同樣の例がある。たとへば青森縣でも津輕を始として、蛞蝸二つながらナメクジリといふ名を持つ土地が弘い。さうして前に擧げたツノダシ、ツノベコの方言は、やはり亦蛞蝓にも適用して居るのである。それから縣境を越えて北秋田の比内地方に入ると、僅かに區別の必要を認めて、今は蝸牛の方だけをナメクジリ、蛞蝓はナメクジと謂つて居る。岩手縣でも盛岡の附近は、二つともにナメクジラの語によつて知られて居るが、特に蝸牛のことのみをいふ場合には、やはり肥前の諫早などゝ同じく、長たらしくカエンコノアルナメクジラと謂ふさうである。同じ一致は又ちやうど、津輕と島原との中程にも見出される。たとへば飛驒の北部に於ては蝸牛蛞蝓共にマメクジリ、又はマメクジラであり、中國では安藝の安佐郡北部なども、二つともにナマイクジリである。伊豆七島の神津島などでは、蝸牛の方言はカイナメラ、さうして蛞蝓の名はナメランジであつて、それがナメラ蟲から出たことは、相州の津久井又は楪ヶ谷の山村に於て、後者をナメラ若くはナメラクジといふのからも類推せられる。如何なる事由に基づくかは知

らず、伊豆海島の方言は、却つてやゝ相模の方に近いものが多い。是が行く／＼又でも蝸牛の名の起源の、曾て此地方にも獨立してあつたことを、心付かせる端緒にならうも知れぬのである。ナメラ・ナメラノクジの蛞蝓方言は、今尚横濱四周の海近くの村でも耳にすることがある。卽ちマイマイツブロといふ蝸牛の名は、必ずしもさう古くから此土地にあつたものと、考へることは出來ないのである。

此等最も顯著なる五箇處の例の外に、尚この二つの動物の名が、曾て同じであつたといふ痕跡を、留めて居る土地は幾らもある。たとへば福島縣の石城郡で、蝸牛をツノベコの外にカイナメクジといふのは、もと兩方ともにナメクジと呼ぶ習ひがあつた證據である。奥州南部領でも南端の遠野地方などは、蝸牛をヘビタマグリ又はタマクラといふ以外に、ナメクジラとも稱へて居て、しかも蛞蝓の方だけを差別してヤマヒルと謂ふ人が多いのである。方言は一つの土地に必ず一つしか無いものゝやうに、速斷して居る人には解しにくいことだらうが、言語は決して法令の如く、今日から別のものに改めるといふ區切りなどは立つもので無い。事の改まつて來たのは選擇であつたこと、卽ち七分三分に併存したものゝ、二つ以上あつたといふことを推察せしめるのである。

だからマイマイ領域の殆ど中心とも目せられた天龍水域の兩側などにも、マメクジといふ語は相應に認められて居り、それを主として蝸牛の方に用ゐて、蛞蝓には別に名を付與した例さへ多いのである。たとへば遠州の掛川附近でオヒメサマ又はオジョウロ、三河の長篠あたりでオンジョロサマ、是が何れも蛞蝓の名であつた。是も別種の童詞をもち、或はあの斑紋を伊達な衣裳、あの角を簪や笄に見立てたからでもあらうが、兎に角さういふ名の入用になつた元はといふと、差別の必要、殊にマメクジといふ名を是非とも貝のある蝸牛の方に、持たせて置きたかつた希望からである。他に何等か今少し手輕なる方法があるなら、それによつて差別してもよかつたのである。三河の南設樂郡及び尾張東春日井郡の或村では、マメクジといへば蝸牛、蛞蝓は之をメメクジと謂ふと、各々其郡誌には見えて居る。さうかと思ふと土地は忘れたが、ナメクジは蛞蝓のことであつて、マメクジは即ち蝸牛のことであると、敎へてくれた人もあつた。併しさういふ紛れ易く移り易い二つの名を以て、最初から差別したものでは無かつたらうと思ふ。

或は又肥前の島原半島でも、深江といふ村などは蝸牛はナメクジ、蛞蝓はミナクジといふと報せられて居る。今一度問ひたゞして見たいと思ふわけは、是が逆さまであつたら私などにはよく

わかるので、一方は即ちミナナメクジ、蜷のあるナメクジと解せられるからである。それから又隣の伊豆の八丈島で蛞蝓をダイロヽ、對馬の豐崎村でも蛞蝓をダイリョウといふのは、前に私の假定したダイロは貝から「出ろ」の意味だといふ説と、兩立せぬやうに思はれるが、是もハダカダイロなどの元の意味を忘れ、たゞ其語の前半を省略したものと解すれば、格別の不思議は無いのである。蛞蝓を裸ダイロといふ例は、上州の邑樂郡又武藏の秩父郡にもある。安房では蝸牛が單にメャメャアであつて、蛞蝓は之はハダカメャメャアと謂つて居る。常陸の蛞蝓は小野氏の本草啓蒙に依れば、ハダカマイボロと呼ばれた土地もあるらしいが、近年下野河内郡の富屋村で採集した編では、之をナイボロ又はネヤボロと謂つて、たゞ蝸牛のみをダイロと謂つて居るとある。即ち蛞も一つの邊疆であるが故に、一方は北から來た大勢に順應し、他方は乃ち南隣の形を移したのである。ナイボロ・ネヤボロは前にも述べた如く、本來マイマイツブロの轉訛に過ぎなかつた。是も頭にハダカといふ語を附けなければ、蛞蝓の名になる筈は無いのであつた。しかも人は二者混亂の虞が無い限り、かゝる理由無き略稱にも從はうとしたのである。蛞蝓は又同じ下野でも芳賀郡などではエナシメ、常陸は西茨城郡其他でイナシと謂つて居る。話主は却つてもう忘れて居る

か知らぬが、是は疑ひも無く「家無し蝸牛」の上略であつた。上總も西岸の舊望陀地方では、蝸牛はメエメッボで、蛞蝓はエーナシ又はイエナシである。或は又エーナシゲゲボといふ例もあることは、上總國誌稿に見えて居るが、ゲゲボは即ち亦一つ前の蝸牛の方言で、是はマイマイボウにデデムシの影響のあつた例である。「家無し」といふ限定詞は此の如く、多くの蝸牛方言の上に附けられたのであつた。美濃の舊方縣地方はデンデンムシ領であるが、茲でも蛞蝓はエナシと謂ひ、尾張の葉栗村はメエメエコウジの飛地であるが、茲でも亦其方をイエナシと謂つて居る。それから寛延年間の「尾張方言」にも、蛞蝓をヤドナシといふ語が錄せられて居るのである。

　ナメクジといふ語の初の半分が、あの粘液を意味して居たことは想像することが出來る。現に其異名を沖繩諸島ではアブラムシ・ヨダレムシ・ナメムシ等、近江の東部ではハナタレムシ、熊野の海岸ではヤネヒキ、大和の十津川ではヤネクヂラなど、謂つて居る。是がもし此蟲の第一の特徴であつたとすれば、蝸牛にもそれは共通のものであつた。だから鹿兒島縣の一地には、又ユダレクイミナ（涎くり蜷）の方言が行はれて居るのみならず、中部日本の蝸牛の童詞にも、火事があるから出て水をかけるだの、湯屋に喧嘩があるから棒を持つて出て來いだのといふ、をかしな文

句が多いので、何れも其體がぬれ〳〵と滑かなるを見て、興を催した結果に他ならぬと思ふが、しかも其ナメクジの本意が少しでも不可解になると、やがては次に生れたるマイマイの名と複合して、いつと無くマイマイ小牛の歌を生ずるに至つたのである。但しナメムシ・ナメラといふ語の今でも各地にあるのを見ると、クジといふ下半分は後から附いたに相違ないが、其意味は尚一段と察し難い。倭名鈔や本草和名などの古訓は奈女久知であつて、少なくとも記錄者は之を小牛や蛆と認めなかつたのであるが、蛆をヲウジと謂ひ小牛をクウジといふ地方語も、相應に弘く分布して居たので、それを其積りで使用する風は、既にナメクジ共用の時代からあつたのかも知れない。角を面白がる小兒たちには、單なる有り來りの音符號として、奈女久和のクヮを取扱ふことが出來なかつたのは自然である。さうして之を小牛の音の如く解したのは、必ずしもマイマイといふ新語の出現に伴なふことを要しなかつたらうと思ふ。

語感の推移

別の言葉でいふならば、マイマイコウシも亦マイマイツブロと同樣に、方言の複合と變境現象

の一つであつて、殊にmuの音親近によつて、可なり有力なる支援を、隣のナメクジから得て居たものであつた。蛞蝓二蟲の名を共にする風が、若し私の想像する如く、曾て全國一般的のものであつたとすれば、この複合の各地に偶發したことも、決して意外では無いのである。

是と同種の複合は、更に又デンデンムシの方にもあつた。たとへば現在知られて居るだけでも

デンデンガラモ　　能登鹿島郡灘地方
デンデンガラボ　　同　石動山下
デンデンダイロ　　上野群馬郡
デンデンツブロ　　常陸眞壁郡
デンデンベエコ　　陸中釜石附近
デンデンタツボ　　伊勢飯南郡
デンデンゴオナ　　備中連島町附近
デンデンケエボン　豐前築上郡

などがあつて、何れも其土地限りの蝸牛の一異名であるが、それが附近を征服して一つの獨立し

た方言領と認められるには、未だ流傳の一條件を具へなかつたのである。之に比べるとマイマイツブロの複合の方は、時期が早かつたか使ふ子供が多かつたか、更に角に亘り若干の文書にも算せられ、人は却つて田舎に殘つて居るマイマイの方を、其省略であるかの如く思ふ樣にもなつた。併し其推測の正しくないことは、童詞が主として七音節の語を必要としたことを、考へて見ただけでもわかる上に、別にメエメエクウジやマンマンダイロ等の如く、其上半分を共通にしたものが、端々の地に分散して居るのを見れば、先づ疑ひの餘地は無いのである。さうすると次には如何にして此語が現出したかを知るために、是非とも是を元の單純なる形に復して、ツブロとマイマイとを別に考へる必要があることを、認めないわけには行くまいと思ふ。

マイマイといふ語の元の起りは、以前一二の學者も既に推量して居た如く、本來は蝸牛の貝の形、卽ちあの卷き方に基づいて附けた名なることは、大よそ確かなやうである。蝸牛以外の物の名に、同じマイマイの語を用ゐて居るものは、或は是も小兒の觀察かも知れぬが、第一には淵の水の渦卷がある。中國の田舎などでもさう謂つたかと思ふが、富山縣などでも渦はマイマイであり、又ギシギシ若くはギリギリであつた。三河碧海郡では之をギリと謂つて居る。ギリギリとい

ふ語は弘い區域に亙つて、專ら頭の髮の旋毛をさして居るやうだが、その旋毛を土地によつてはマキマキ又はマイマイ、東京などでは多くはツムジと謂つて居る。ところが又一方にはツムジ風と稱して、渦を卷く風のことをツムジといふ例も普通であり、其ツムジ風を我々は又、子供の頃にはマイマイ風とも呼んで居た。さうするとマイマイが少くとも「卷く」といふ語に因みあることだけは明らかで、ギリギリとツムジとは、如何なる理由があつたかは後の問題として、とにかくに曾てその一つの物の名であつた。それを知らずしてマイマイにツブリを複合させて見ようとする者も出來たが、その最初の意味に於ては、二語は全然同じであつたかも知れない。何にしても蝸牛は其形が錘に似て居るから、ツムリだといふ語原説は怪しいものであつて、錘が日本の纖維工藝に採用せられたらう頃には、既に谷と水面とのツムジが有り、人の頭髮にはギリギリが存在し、又蝸牛は既にかのツブラなる貝を背負つてあるいて居たのである。其中でも旋毛は小兒までが髮を後に垂れて居た時代には、今ほどは眼にも立たなかつた筈である。水の渦卷よりも又旋風よりも、更に尚一段と有りふれたマイマイの實例は、恐らく各家の庭の木草を匍ひ渡る蝸牛であつて、それ故に又女の束髮の妙な形が流行して來れば、忽ち又之を此蟲にたとへ、或は米澤地方

で今も見る如く、淵の渦巻をもダイロウマキと謂ふことになつた。語が若し一つで同じなら
ば、是も亦今一つ前からあつた類似のものから、移し譲られたものと見る方が當り前である。

何にもせよマイマイといふ方言の始めて出來たのは、蝸牛の蝸といふ漢字が案出せられた頃よりも、同じ事情であることだけは認められるのである。しかし一旦其語が出來て後は、人はいつまでも當初の心持を以て、之を使つて居るものとも限らなかつた。何か今一段と適切なやうに感じられるものが見つかると、少しは發音の形を變へてでも、寧ろ其方へ寄つて行かうとしたことが、往々にしてあつたやうに思はれる。その一つの例は靜岡縣の大井川附近の村で、蝸牛をマイマイドンと謂つたなどがそれである。殿や樣の語を人で無いものの名に添へることは、蠶をオコサマ、オボコサマ、又は爐の自在鍵をカギドノといふなど、幾らでも其類はあることだが、是は何れも其物を尊敬し、又は拜みもしたらうと思ふ名殘であつて、蟲のマイマイの方にはまだ一向にさういふ話を聞かぬ。ところが他の一方には別にマイマイドンと名けられて、大いにもて囃された職業の者が、諸國をあるいて居た時代があつたのである。越前丹生郡の幸若太夫なども其一流であつたが、尚他の地方にも往々にして神社に從屬し、祭の日には出で神樂の舞を舞ふ者が住んで居

て、それをも皆「舞舞ひ」と稱へたのであつた。舞舞ひの居住地は今も地名となつて數多く殘つて居る。さうして安樂菴策傳の醒睡笑が出來た頃までは、彼等の技藝はまだ田舍の生活の最も面白い語り草であつた。それが年月を追うて大きくなり又眞面目になり、愈々近代の歌舞伎にまで發達したことは、もう蝸牛考の筆者の領分では無いが、とにかくにマイマイといへば直ちに此等の職業藝術家を聯想せずには居られぬほど、弘い流行を見た時代があつたことのみは事實であつた。それがいつとも無しに只が渦卷だからマイマイと呼ぶといふ程度の、淡い興味と解説とを乘取つてしまつたのは不思議で無かつた。

其中でも歌謠は取分けて、斯うした誤解を引起さしめ易い機會であつた。といふわけは普通の會話であれば、意味を考へずに言葉を使用することも比較的少ないのだが、歌は口眞似口拍子で、又久しく多くの者が繰返して居るうちに、自然に本を省みる場合が少なくなつて來たのである。其結果が常陸南部のメエボロや、下總銚子でのヲバヲバなどの如く、丸で外形を一變させることもあれば、他の一方には内容の著しい推移に心づかず、最初からかの舞舞太夫の物々しい立居振舞によそへて、斯んな名を付與したものゝ如く解する者も出來て、それが更に又次の變化を誘ふ

ことがあつたのである。方言生成の事情が是まで絶望に近い不問に置かれたのは、この内外二種の變化が、あまりにも錯綜して居たからであつた。近い頃の例でいふと、明治の中頃の流行歌の一つに、アカハラデンデンムシ云々といふをかしな囃し詞を伴なふものがあつた。さうすると近江の湖水の南岸には、赤腹デンデンムシといふ蝸牛の異名が、早一つ増加して居る。信州諏訪の北山地方には、蝸牛をデエラボッチャといふ語も少し行はれて居るが、デエラボッチャは本來大昔の巨人、一夜に富士の山の土を運んだといふ類の傳説の大太法師のことであつた。それがダイロといふ方言の流布過程に、半ば不用になつて轉がつて居た爲に、測らずもこれへ卷込まれてしまつたものらしい。卽ち一方には又此樣に、語があつて宿主を求めて居たやうな場合も折々はあつたのである。たゞ其方は選擇の動機が特殊であつた爲に、最初から廣い領域に延びて行く力を持たなかつた。從うてさういふ一地限りの奇異の例だけによつて、方言の性質を說かうとした各地の試みは、大抵は失敗に歸して居るのである。

之に反してマイマイを舞舞ひのことだと解した早合點などは、假令誤りにもせよ弘く又久しいものであつた。前に引用した土御門院の御製に、「立ちて舞ふべくもあらぬ世なれ」と詠ぜられた

のは、本歌は源氏の紅葉賀であらうが、とにかくに既に舞舞ひの異名のあつたことを御承知あつての御詠であつたと思ふ。それから近世になつて、相模にも蝸牛をデンボウラクと謂ふ土地があり、豐前の宇佐郡ではデエラクドン、豐後の國東半島でデエラドンとも謂つて居るのは、前者は栃木地方のデエボロや甲州郡内のデンボロと緣を引き、後者は瀬戸内海沿岸のデエデエ系統に屬すべきものではあらうが、尚其以前から此蟲の姿に對して、神事舞の太夫を想ひ起す習はしが無かつたら、恐らく此樣な「轉訛」は生じ得なかつたらうと考へられる。我々は幸ひにして舞舞ひといふ職業の流行した時代を、略記錄によつて明らかにし得る御蔭に、このデンボウラク等の方言がそれよりも遲く、マイマイといふ地方語の方はずつと古くから、又今日は既に無くなつて居る土地にも、曾て存在したことを推測し得るのである。之を要するに方言なるものは、それ〴〵の時期とそれ〴〵の因緣とがあつて、段々に生れたり消えたり、移つたり變化したりしたことだけは大抵確かであつて、之を無差別に總括して、國語だから何れも民族と共に古いといふことも出來ず、文語京都語で無いから皆近世の新作だと、いふことは尚更出來ない。そんな無茶なことをすれば、いつの世になつても我々の言語學は完成しない。それを悲しいと思ふ者は、是非とも國

語の歴史を斷らいふ風にして尋ねて行かなければならぬのである。

命名は興味から

三河と尾張との境、即ち又ちやうど二つの方言領の接觸する處に、蝸牛をネギャロといふ小區域のあることも亦一つの特例ではあるが、是などはマイマイドンの説明から推して、大よそは其起りがわかる樣な氣がする。人に譬へられた色々の小さな生物の中で、ネギドノといふものには「ばつた」がある。此蟲の所謂機を織る容子を、禰宜が起居して拜をする身ぶりに思ひ寄せたのである。信州の上伊那では蟷螂をネギサマ、是もあの蟲が臂を張り手を高く上げる姿を見て、多くの民族で「をがみ蟲」と名ける位だから、さもあるべきことゝ思はれるが、蝸牛の擧動に至つては實はそれほどの類似は無い。何か今一つ以前の下染が無かつたならば、さう容易には斯んな語は浮び出なかつたと思ふ。同じ地方には又キネキネともいふ語があるが、つまり其キネなりネギなりは、もと神の前に出て舞を舞ふ人の名であつた故に、戯れて蝸牛をさう呼ばうとする心持が、既にマイマイの語を知つて居る周圍の人から、存外容易に承認せられ得たのであつて、外形は寧

つて居ても是も亦マイマイ領域の、一つの邊境現象と見るべきものかと思ふ。

此解釋が必ずしも強辯附會で無いことは、我々の祖先の物に名を付ける方法、殊に他民族に優れて活々として居たことを、考へて見るのが一つの證明法である。それには實例は幾らでも擧げられるが、議論の或は放漫に流れんことを憚つて、茲にはたゞ一つの最も蝸牛と關係の深いものを、稍詳細に說いて見ようと思ふ。關西の方面では隨分古くから、別に今一つマイマイと呼ばれる小さな蟲があつた。それは標準語でミヅスマシといふものであつて、地方によつて次々の異名が案出せられ、又少しづゝは採擇もせられて居るのであるが、此語の行はるゝ區域では、何とかして是と蝸牛のマイマイとに、差別を立てる必要があつた。是が蝸牛の方に色々の複合形が出來、又デエデエムシ其他の新しい方言が、夙に此語を押除けて、代つて勢力を布くに至つた隱れた原因の一つでもあつたらしい。ところが其「水澄まし」のマイマイの方を、津輕地方では又ミョと謂ひ、中國の山地の蝸牛をマイマイといふ村々では、ミヨノマヒなどとも名けて居たのは、やはり亦マイマイといふ元の名から、轉じて舞を舞ふ人の名を宛つるに至つた一例である。

元來ミヅスマシといふ名稱は、我邦の北と南の半分づゝで、全然別々の二種の蟲に付與せられ

て居る。さうして其語音の上品である爲に、雙方とも之を標準語の如く、思つて居るが故に誤解がある。關西方面でミヅスマシと謂ふのは、本草の水黽であつて、東京では誤つてミズクモと謂ひ、他の地方では又飴の香がする故にアメンボウだの、ギョウセンだのアマヤノオカタだのとも謂ふ足の長い蟲である。或は嘗めて見ると鹽辛い味がするといふことで、若狹其他でシホウリ、播磨出雲でシホカヒ、土佐でシホタヽキ、伊豫の大洲などでシホンシホ、又はショウタロウなど、いふ異名も行はれて居た。是にも比較をして見れば面白い變化があるのだが、それ迄は茲には說かない。他の一種關東でいふミヅスマシの方は、即ち本草に鼓蟲とあるものに宛てられて居る。これこそは自分等が少年の頃にマイマイ蟲と呼んで、その奇拔なる水上の遊戲を、飽かず觀賞して居た夏日田園の一景物であつたのである。

このマイマイ蟲も圓く渦を描いて、水面を遊びまはつて居た。京都近くの村にはウヅムシといふ異名があり、上總では又ミヅグルマとも謂つた。水澄ましといふ名前も是から出たのであつて、或は最初には是も亦蝸牛と同じく、渦卷きを意味するマイマイであつたのかとも思ふが、後には確かに舞を舞ふ者といふ意味に、解せられて居たといふ證據がある。それには恐らくは蝸牛とは

似ても付かぬ此蟲の輕快なる動作が、特に命名者たちの空想を促したものと考へられるのである。そこで順序を立てゝ各地の方言、方言とまでは成長しなかつた個々獨立の異名を比べて見ると、第一には此蟲の活動期、殊に多くの子女によつて注目せられた時期の、田植の前後であつたことが其名に現れて居るのである。

シロカキムシ　仙臺、四國でも
タウエムシ　越中
サヲトメ　東京近郊、上州等
ソウタメ　加賀越中など
ヒヨウタメ　越中

ミヅスマシが此樣な異名を得た事情は、以前の村々の五月少女の歌淸く、笑ひ花やかであつた光景を知る者ならば、容易に想像し得ることであらう。その田人たちが苗取り終つて家路に向ひ、やゝ田の水の靜かになる夕暮方などに、此蟲は出て來て水の上を遊んだのである。それ故に又此蟲の名は、をのづから「水澄まし」であつた。

スメスメ　　　　土佐
ミミコミ　　　　備後
カスメ　　　　　奥州南部
スボ　　　　　　信州
トゞトツト　　　奥州八戸

などといふ名稱に至つては、更に一歩を進めて命令形にまでなつて居るのは、恐らくは亦子供に
その遊び仲間であつたらう。即ち濁つた泉の水などを掻きまはして、その遊戯を作る事になるやうな
心持を、この小さな蟲の擧動の中に見出したなどは、到底年とつた者ばかりの寄合では出現の望み得
ぬことであつた。或は之に伴なうて歌があり、又は童話なども有つたのかも知れないが、さうで
無いまでも此空想には多分の餘裕があつた。

ジカキムシ　　　羽後、越中、壹岐
ジーカキムシ　　越後西蒲原郡など
ジョウカキムシ　加賀

イロハムシ　上總夷隅郡、遠江濱名郡

エカキムシ　佐渡

カイモチカキ　大阪、四國某地

カクといふ所から推斷にして、幼なき人々の想像は馳せたのである。實際をたきゝする樣子にちの手つきなどを、聯想せしむるに足るやうな此蟲の舞ひ方でもあつた。それから更に目に近い出來事にたとへたのは、

ゴキアラヒムシ　水戸、周防、薩摩等

ゴキアレイ　肥前北高來郡

ゴキマハシ　上州

ゴキマイリ　近江

ツンアラヒ　肥後玉名郡

ヲケアラヒ、ヨケアラヒ　同上

ワンコアラヒ　羽後河邊郡

ゴキといふのも木の椀の古名である。陶器の茶碗が一般になつてから後は、もう其樣に丁寧な洗ひ方はせぬのだが、それでもまだ蟲の名前にだけは殘つて居る。即ち今日の不可解は、却つて前代生活の特徴を窺はしむべき便宜ともなる所以である。マイマイが後に神人のことゝ解せられるに至つたといふのも、蝸牛に就いてはまだ之を疑ふ人があらうけれども、鼓蟲の方だけはもはや十分に明白で、その事實が無かつたならば、到底次のやうな異名は發生し得なかつた。

ミコノマヒ　美作
ミコマヒ　備前岡山
ネコマヒ　同　西大寺
ムコマヒ　播州龍野
ミコ　奥州津輕
スヰジンサマ　伊豫吉田町
イタコムシ　四國某地

イタコも今日では奥州より外の地には居ないが、是亦歌舞を業とする一種類の巫女の名稱であ

つた。足利時代の職人盡の畫の中に、イタカとある者が是と同じであるらしきこと、及び沖繩の島に今でも居るユタといふ巫女も、起原は一つであるかと思ふことは、曾て私も少しく論じたことがある。そのイタコといふ語が蟲の名になつて、四國の何れかの地方に殘つて居たことは、本草啓蒙が之を錄して居るので、卽ち今は既に絶え果てたものゝ、至つて幽かなる痕跡であつたのである。

是等各府縣のマイマイ蟲の異名が、たとへば小兒によつて又は小兒の愛護者によつて、案出せられたか否かは決し兼ねるにしても、少なくともそれが最初から唯一つの、持傳へて失はなかつたものであるといふことを、明言し得る人は恐らくはあるまい。物の名は此通り幾つも出來、又幾つも消えて無くなつて、結局時代々々の人の心に、最も興あるものが力強く生きるのであつた單に人間が語を選擇する能力を具へて居たといふ以上に、更に現在の古語なるものに、その又一つ前の異なる形のあつたこと、及び現在我々の話して居るものも、やがてはより適切なるものに改まるべきことも、之に由つて證明せられたわけで、從うて何が其推移の元の齒車であつたかといふ問題が、いと大切になつて來るわけである。若し私が童兒の力といふことに餘りに重きを置

きすぎる嫌ひがありとすれば、或は之を人間の子供らしさの、力と言つてもよいかも知れない。更に角に言語を決定するのは學士院、その他氣六つかしい學者たちの寄合では無かつた。彼等は單に文章に使はるべき言葉の好惡をいふだけで、所謂俗語の活躍を抑制する力は有たなかつた。蝸蟲を單にマイマイと謂つたのは、京都を中心として大和近江、越前にも紀州にも見出される。其の方言としての領域は、恐らくまだずつと廣いことゝ思ふ。私の生れた播州の中部でも、さう謂つて通じはするが普通にはゴマイムシと謂ひ、又附近の諸郡にはゴマメムシといふ者さへあつて、小兒は之に由つて亦新たに、胡麻の色形などを聯想して居たやうである。近江の湖東の村にはゴマイマイリといふ例もあつた。京都も賀茂あたり、又越前の一部ではマイマイコンゴウ、伊勢の南の方ではマイマイコンボとも謂ふ者があつた。此等も七音節だから、恐らくは亦童詞に基づくものであらう。さうして同時に又幼年の者が、一人で旋轉して遊ぶことを、即ち東京でキリキリマヒになどゝいふ遊戲にも、半ばは意識して同じ語を流用して居たのは、恰かも春の野に摘む土筆といふものに、秋啼く蟬の名のツクツクホウシを流用したり、雉子の親鳥を詠じたケンケンバタバタといふ歌言葉を、其儘片足飛の遊戲の名として居たのと同じことで、以前に別の語が無かつたの

では無く、寧ろ其反對に有つて餘りに平凡になつた爲、斯うして新たなるものを歡迎したのであつたらうと思ふ。

上代人の誤謬

デデムシ又はデエロとマイマイと、この二つの新らしい名詞の分布を究めて見ると、其次に自然に起つて來る問題は、倭名鈔以來の文籍に認められた加太豆布利といふ言葉は、末にどうなつてしまつたかといふことである。自分の此問題に對する最初からの推測は、此語が方言となつて必ず更にマイマイ領域の外側に、分散して居るだらうといふに在つたが、附載の地圖によつて通觀し得る如く、大體に想像は誤つて居なかつた。但し其說明に入るに先だつて、茲にもう一度明らかにして置きたいと思ふのは、記錄と地方言語との關係である。所謂月卿雲客たちの口にすることが、鄙の言葉に對して一段の優越を認められてよかつたのは、法令の名目とか輸入の事物とかの如く、一旦權能ある公の機關に由つて、統一し又整理せられたものに限るのであつて、四民日常の共用するところ、殊に主として女子や少人によつて口すさまれる言葉などは、偶然それが

學問ある人の筆に上つたからとて、少しでも匡正の力を有つ道理は無かつた。果して正しいか片言であり聽きそこなひであるかは、容易に決し難い問題であるのみならず、使用者が諸共に誤つて居る場合さへも、幾らでも想像し得られるのである。誤りといふのも實は或時代或地方に比べて、同じで無いといふだけのことで、それでも通用する以上は言語で無いとは言はれない。標準語はつまり前にもいふ如く、單に或期の現在の便宜と趣味とに基づいた選擇であつて、之を論據として國語の事實を、否認することまでは許されぬのである。國語の事實は此上も無く複雜なもので、我々はまだ其片端をすらも知り得たとは言はれない。之に對して文書の採錄は、單なる偶然であり又部分的である。從うて現存最古の書物に筆記せられて居る言葉が正しく、又最も古い固有のものだときめてかゝることは、無法なる臆斷と言はなければならぬのである。

此立場から考へて見ると、世の多くの語原論なるものは、誠に心もと無い沙上の樓閣であるのみならず、假にたま／＼其本意を言ひ當てたりとしても、第一に其發見に大切な價値を付することは出來ない。深思熟慮の結果に成る言葉といふものも想像し難い上に、その傳承と採擇とに際しては、尚往々にしていゝ加減な妥協もあつたからである。それを一々に何とか解釋しなければな

らぬものゝ如く、自ら約束した學者こそは笑止である。私などに於ては倭名鈔の所謂加太豆布利が、果して山城の京を距ること何十里、源順君の世に先だつこと何十年間の、事實であつたらうかを危む者であるが、謹嚴なる和訓栞の著者の如きは、之を神代以降の正語なりと信ずるが故に、乃ち偏角振（かたつのふり）の義なるべしなどゝ說いて居るのである。若し片角振りならば片角振りと謂ひさうなものである。何人が何處で其樣なわからぬ省略を申し合せたとするか。實に思ひ遣りの無い獨りぎめであつたが、さういふ事も亦近頃までの流行であつて、一人の谷川氏のみを難ずることは出來ない。それよりも更に思ひ切つた一異說は、物類稱呼の著者が得たといふ實驗談であつた。蝸牛は雨の降る前になると、角だか貝だかを鳴らしてカタカタといふ音をさせるさうして其形は錘と似て居るからカタツムリだといふなどは、語原論と言はうよりも寧ろ落し話の方に近いのである。

實際或はさうでも言はなければ、說明は六つかしかつたのであらうが、果して此京都語が出來た最初から、カタツブリであつたか否かにも疑ひがある。語原を考へる位ならば、何をさし置いてもその原の形といふものを確かめなければならぬのだが、現在はまだ其方法が立つて居ない。

それで先づ試みに此語の領域、もしくは分布狀態を尋ねて見なければならぬが、カタツブリは今の處では中央には殆ど其跡を絶ち、主として京都から最も遠い土地ばかりに、單獨に又は他の語と併存して用ゐられて居るのである。次に列擧するもの丶中には、文學によつて匡正せられた例も交つて居ないとは斷じ難いが、まだ普通には今まであつたものを、全部無くしてしまふ程の力は無かつた筈であるのに、少なくとも秋田縣の各郡などは、是以外には全く別の名稱を持つて居ないのである。

カダツブレ、カサツブレ	羽後秋田市
カタツンブレ	同　南秋田郡
カサツンブレ、カナツンブ	同　河邊郡
カサツブリ	同　仙北郡
カダツムリ	同　平鹿郡
カダツンブリ	同　由利郡
カサツブリ	同　飛島

斯ういふ中でもカサツブレは御城下の語である故に、どの郡に行つても通用し、又正しいと認められて居ることは、關東のマイマイツブロも同じであつた。尙この以外に他の地方の例を拾うて見ると、

カタツムリ	青森縣南部領
カサツブリ、カサツムリ	羽前東村山郡
カタツンブリ	佐渡外海府
カサツブリ	越後の一部
カサツブ	會津大沼郡河沼郡
カタツモリ、マメジッコ	下野鹿沼附近
カンツンブリ	越中五箇山
カエツブリ、カエツモリ	同　下新川郡
カエカエツブリ、カエカエツモル	同　上新川郡針原
カエツブリ、カエカエツノダス	同氷見郡宇波

カタツブリ、マエマエツブリ　越前阪井郡金津
カタツブリ　同　大野郡
カタツンブリ、カタツター　大和十津川

微細なる音韻の異同は、耳でも判別しにくゝ、筆に現はすことは尚困難であるが、大體に秋田縣などで私の聽いた所は、カサといふ場合のサは必ず澄み、カタといふ場合は必ず濁つて、幾分かカザに近いやうであつた。それで問題になるのはカタとカサと、何れが先づ生じて後に他方の「轉訛」を誘つたか。乃至は又二つ本來は別々のものであつたのが、ナメクジとマイマイクヮジの如く、後に互ひに近よつて來たかといふ點である。自分等の最初に心づくのは、カサは近世の編笠が起る以前、一筋の縫絲を螺旋させて縫うたものと思はれるから、是ならば最も適切に蝸牛の貝の構成を形容し得たらうといふことである。現にマイマイでも次に言はうとするツブロでも、共に其特徴に據つて出來て居るから、笠に似た貝、笠を著た蟲といふ意味の、名前が生まれることに不思議は無い。併し其反面から、直ちにカサを古しとし、カタを京都の人が聽きそこなひと、考へてしまふことはまだ出來ない。寧ろ是ほど尋常なる一つの名を、特にカタといふ音に變を做す

には、それだけの理由があつたものとも見られるのである。現在のところでは、カタにはまだ獨立した由來を見出すことが出來ぬから、假にカサ・カタを一種と見て置くが、事によると別に第四の方言の行はれたものがあつて、後に勢力を失うてカサツブリと合體したのかも知れない。カサツブリと近い方言が、主として日本の北半分に分布して居るに對して、南の半分には單純なるカタ系統の語が多い。それが雙方ともに國の端ともいふべき地方であつて、中央との關係が對稱的になつて居ることは、注意しなければならぬ點であらう。今日までに知られて居る例は、

マイマイカタツボ	伊勢多氣郡
カタツボ	同　度會郡
カタカタバイ	紀伊南牟婁郡飛鳥村
カタジ	同　熊野串本浦
カタカタ	同　下里村
カタカタ、カタ・タ－	大和十津川
カッタナムリ	土佐高知附近

カタカタ　同　幡多郡
カタト　伊豫宇和島附近
カタタン　同　喜多郡
カタクジリ　肥後八代郡金剛村
ガト　丹後加佐郡

ぐらゐのものであるが、此中間にも未だ採集を試みざる地域は弘い。但しマイマイとの著しい相異は、彼は中國山脈などの内陸に殘つて居るに反して、この方は專ら海沿ひの地の、しかも岬角と名くべき地に分布して居て、此點が又北部のカサツブレとも一致することである。伊豆の半島のカサツパチ若くはカーサンマイといふ蝸牛の方言なども、明らかに亦その類例であるが、それが駿州に入つて優勢なるマイマイと接觸し、到る處にカサノマイ、カサパチマイマイ等の複合現象を呈する外、北は富士山の東西裾野を過ぎて、甲州の約半分を風靡し、更に東は足柄を越えて相模愛甲の山村まで、このカァサンメの領分に取込んで居る爲に、人は或は其發源の何れに在つたかを疑うて居る。併し甲州は其武力に於ては久しく或一家に統一せられて居たに拘らず、方言

の關する限り殆ど四分五裂であつた。周りの國々の言葉は峠を越え流を傳ひ、何れも中央の平地に降つて對立し、一つとして此山國を通り拔けて行つたものは無い。言はゞ一種の緩衝地帶であるが、此實狀に眼を留めて見た者ならば、少なくとも此方が終端の行き止りであることを、信ぜないでは居られぬと思ふ。さうして一方には東海道は又マイマイといふ語の往還の路であつた。殘る所は此半島の袋の底に、一つ以前の語が押込められて、偶然に忘却を免れて居たものと、解するの他は無いやうである。半島が古い文物の保存地となることは、既に多くの學者も說いて居るが、方言に於ても其實證は乏しとせぬ。例へば關東東北ではニホと謂ひ、中央部ではスズキ・スズミ、西國ではホヅミなどといふ稻の堆積を、志摩と伊豆と安房との三國のみに於ては、一樣にイナブラと呼んで居る。それが舟人によつて舟より運ばれたもので無いことは、稻村は彼等と緣の近い物體で無く、陸に居る者にのみ適切な問題であつたことを考へてもわかる。だから外には例も無いが、カサバチは多分古い形の一つであらう。ハチもツブロも本來は近い物であつた。それからカアサンメのメといふ語も、類例を求むるならばツグラメのメがある。恐らくはマイマイとは關係無しに、別に理由があつて早くから附いて居たものであらうと思ふ。

單純から複雜へ

加太豆布利のもとカサツブラから轉訛したことが、假に辯護の餘地無しと決しても、兎に角にそれが久しい期間、京都の唯一つの用語であつたことは事實である。然るに今日となつては前に示した如く、僅かに記錄と擬古文とに其痕跡を留むる外、全く邊陬に押遣られて、後に出現した二通りの新語の外側に散點して殘るに過ぎぬといふことは、頗る自分などの主張せんとする方言周圏說を、裏書するに足ると思ふ。而うして此等新舊二名稱の交渉が、必ずしも爭鬪排他を以て終始しなかつたことは、既に澤山の實例があつたのである。即ち少なくとも領分の境堺近くだけでは、幾つかの異名は稍暫らくの間並び行はれ、徐々に其中の一つが重きを爲す場合もあれば、或は又二つの語が程よく結合せられて、歌になつたり長たらしい語になつて殘らうとした。その目前の例はデンデンムシムシカタツムリもそれであり、又標準語のマイマイツブロも、一つの顯著なる複稱であつたことは、單獨にマイマイとのみ呼ばれる土地が、相應に弘いのを見てもわかる。さうすれば茲にツブロといふ一語が、既に其以前に實在し、それが又倭名鈔の加太豆布利と

りも、今一段と古いものであつたことは、大よそ推定して差支へ無いわけである。カタツブリがマイマイ又はデエデエの新たなる波に押遣られて、外の波紋となつて遠く出たことが確かならば、其ツブロも亦同じ様に、どこかの一隅に行つて殘つて居てよいのであるが、果してどの程度にまで我々は其形跡を認めることが出來るだらうか。

現在の方言分布に於ても、蝸牛を單にツブロと呼んで居る地方は、捜して見るとまだ決して希有では無い。宇都宮附近の或村にツーボロカイボロといふ童唄があるのは、越中下新川郡の海近くに、ツドロガエドロといふ名前があると同じく、或は口拍子の無意識なる變化とも見られるが、岐阜縣では武儀郡洲原村附近にツンブリといふ語が今もあり、其隣の山縣郡などでツンツンと謂つて居るのも、或は「つの〳〵」の歌が之を誘ひ出したにしても、是と全く關係無しとは見られぬのである。丹波の福知山の如き京都に近い土地にも、やはりツンブリといふ蝸牛の異名がある。伊豫の吉田町はカタトの領域ではあるが、一種食用に供せられる蝸牛だけを、シマツブリと呼んで居たさうである。それから更に些少の變化を經た九州各地のツグラメ、及び是と同じであつたことが、證明し得られる奥州のタマグラなどを加算するならば、ツブラの領分はやゝ中央から遠

いといふのみで、却つて其總面積に於てマイマイを凌駕するかとも思はれるのである。

しかし私は其詳細に入つて行く前に、今少しく蝸牛をツブロ又はツブリと謂ふことの、至つて自然であつたわけを述べて見たい。人が最初に此語によつて聯想するのは、圓といふ漢字を日本語のツブラに宛てたことで、なるほどあの蟲の貝も圓いからと、單簡に片付けてしまふ人も無いとは言はれぬが、二者の因緣は決してそれだけには止まらぬのであつた。紡績具の錘を北國の田舍などでツンボリと謂ふのは、或は圓いといふ形容詞からこしらへた語とも考へられようが、全體から言つて圓さといふ通念が、個々の圓い物よりも早くから名を持つて居た筈は無い。さうしてツブラ又は之に近い語を以て、言ひ現はされて居る「圓い物」には、今でも幾つかの實例があるのである。最も有りふれて居るのは人間の頭をオツムリといふことと、元はあんまり上品な語とも認められなかつたかも知れぬが、それでもさう新らしい變化では無かつたと見えて、沖繩の群島でも北は大島に始まり、南は八重山の端の島に至るまで、ほとんど一樣に頭をツブル・チブル又はツプルと呼んで居る。歐羅巴の諸國にも例のあることだといふが、日本でも是は瓢の名から出た一種の隱語若くは異名の如きものであつたらしい。南の島々でも八重山と道の島の兩端では、タ

顔をツブルと謂ひ、又時としてはマツブルとも謂ふから、知りつゝこの二つの物に同じ名を付與して居た時代はあつたのである。

瓢簞は又佐渡の島に於てもツブルであつた。昔の水を汲む器は主として是であつたから、今日の所謂釣瓶のツルべを、ツブレと發音する者を嘲笑することは、恥をかくまいと思へばもう暫らくの間見合さなければならぬ。へといふ言葉は大抵は竈に屬して居る。ツルべといふ名稱こそ實はよほど怪しいので、事によると是も一つの「ツブラなる物」であつたかも知れぬ。ヒョウタンはとにかくに日本語では無かつた。奥州は今でも一般に之をツボケと謂つて居る。ケとカイとコとの區別異同は茲で論じないが、とにかくに二つながら物を容れる器の總名であつた。さうすると土でこしらへた器をツボ、及び土器の製作者を鹿兒島縣などでツボ屋といふのも、共にこの北日本のツボケといふ語と、何等かの聯絡のあつたことが察せられるのである。

蓋し轆轤といふものゝ使用をまだ知らなかつた時代の人が、土器をツブラにする術は渦卷より他には無かつた。即ちツブラといふのは單に蝸牛の貝の如く圓い物といふだけでは無く、同時に又粘土の太い緒をぐる／＼と卷き上げること、恰かもかの蟲の貝の構造の如くにしなければなら

なかつたのである。ツボといふ語がもとツグラといふ語と一つであつたことは、現に地中から掘て来る一片の壺のかけを、検査して見たゞけでもわかることであるが、この上代の製作技術が、今日まで其儘に保存せられて居るのがツグラであつた。ツグラは東北などではイヅメと謂ひ、又イヅコと謂つて居る。東京では單にオハチイレなど、稱して、今はたゞ冬の日の飯を冷さぬ爲に使用するのみであるが、甲信野越の國々を始めとして、ほとんど日本の田舎の半分以上に於ては、米の飯よりも尚何層倍か大切なもの、即ち人間の幼児を此中に入れて置いたのである。日本國民の最も強健朴直なるものは、いつの世からとも無く、皆此ツグラの中に於て成長したのであつた。それを作るの法は至つて簡單で、何れも轆轤以前の陶作と同様に、一藁の太い繩を螺旋状に巻き上げて、中うつろなる圓筒形を作るのが即ちツグラであつた。續群書類從に採輯せられた閑窓自見集には

　山がつのつぐらに居たる我なれや心せばさをなげくと思へば

　　ツグラとはトグラといふ物の事か。わらうたか。五音歟

とも見えて居る。其ワラウダなるものも製法は略同じで、是も亦昔の日本人の家居生活に、深く

べからざるものであつた。一たび斯ういふ工作の順序を熟視した者ならば、我々の祖先が蝸牛をマイマイと呼び、又はカサパチと名けた以前に、之をツグラ又はツブラと名けずに居られなかつた事情を、解するに苦しまなかつたことゝ思ふ。土器の工藝に大なる進歩があつて、忽ち是等の語は相互の脈絡を絶ち、個々獨立の符號の如くなつてしまつたけれども、幸ひに其痕跡だけはまだ方々に殘つて居る。たとへば東京などでは、藁のツグラをもう忘れてしまつた人々が、「蛇がトグロを卷く」といふ言葉だけは常に使つて居る。蛇の蟠まつて丸くなつて居ることを、肥前の平戸あたりではツグラ、佐渡の島でもツグラカクと謂つて居た。尾張の戸崎ではツヅクナルといふ。ソダカマルといふ動詞もウヅクマルといふ動詞も、中間にツクネル・ツクナルなどといふ俗言を置いて考へて見ると、やはり此ツグラに關係があつたのである。蛇のトグロを私たちの故郷では普通には蛇のコシキと謂つて居り、壹岐の島ではコーラキと謂つて居る。豐前の小倉ではサラを卷くと謂ひ、越中でも富山近在ではサラになると謂ふ外に、一方頭の髮の旋毛もサラであつた。他の地方では河童だけにしかサラといふ語は使はなくなつたが、サラも元はやはり毛の渦を卷いた部分のことであつた。皿も甑も共に其製法が元は圓座などゝ同一であつたことが、此等の名稱

の共通なる原因と見るの外は無いのである。淵の渦卷をサヽといふ例は、何處かにあつたやうに記憶するが、今はまだ思ひ出すことが出來ない。奥州の弘前などでは、乃ち之をツブラと謂つて居るのである。

それから尚一つ、衣服の重なり合つて膨らかになつた部分を、フトコロと謂つて居るのも關係があるかと思はれる。九州でも平戸などでは、蛇のツグラに對して此方をフツクラと謂ふが、それから南の方の肥前肥後の各地では、單にツクラと謂へばそれは懷中のことである。但し此フクラのクは常に澄んで居るやうだが、是も衣類をツブラに卷く故に、さういふ言葉が出來たものと見なければ、ツグラの起りは解說のしやうは有るまい。それとよく似た例は昔の男の坐り方、現在の標準語でアグラカクといふ語の地方的變化である。是は後に出て來るタマグラの條下に、もう一度說かねばならぬから簡單に述べて置くが、大體に相近き三つの言ひ方が用ゐられて居る。西京の附近では大和から紀州にかけて、ウタグラ・オタグラカクなどといふのが多いから、或は歌座であらうと獨斷して居る者もあるらしいが、それは少しも理由の無い當て推量である。九州の北部では概してイタグラメ、近江の彥根邊ではイタビラカクと動詞に使ひ、關東ではやゝ弘く

ビタグラ或はビツタラなどゝもいふから、是は「坐」を意味するキルといふ語の名詞形に、タグラの附加したものと解せられる。豐前小倉ではアビタラクムと謂つて居るのは、更に其上へ脚の語を附けたものであらう。實際胡坐蹲居は足を以てツグラを作ることであつた。それ故に人が樂々と尻を据ゑて居ることを、今でも戲れにトグロを卷いて居るなどゝいふ者もあるので、東京で「どうかおたひらに」などゝいふ辭令も、近畿地方のオタグラといふ語と比べて見て、始めて元の意味が察せられるわけである。伊豆の賀茂郡で之をアヅクラと謂ふなどは、明白に箕坐が足のツグラなることを示して居る。遠江は各郡ともに之をアヅクミ、信州でも上伊那郡までは同じ語がある。所謂飯櫃入れのイヂメ・イヅミ等は、或は「飯詰め」の義であり、イヅコは即ちその東北風の變化の如く思つて居る人があるかも知れぬが、是も亦確かならぬ想像であつて、現に近江の神崎郡などにも、藁で製した此類の畚をイヂコとも謂へば又ツンダヽと謂ひ、信州の東筑摩郡などでは、同じ様な藁製の容器でも、落葉などを入れる粗造のものをイヂツコと謂つて、嬰兒を入れる方のみをイヅミキと謂つて居た。即ち此方は餘程胡坐のアヅクミに近くなつて居るのである。

語音分化

單語には此の如く、至つて僅かの語音の變化を以て、後々相互の差別を附けて行かうとする傾向のあつたことは、實例が略明らかに之を認めしめる。是は蝸牛などの如く次々に新名の案出せられた實例と比べて、どうやら兩立し難い事實のやうであるが、何れにしても人の物言ひ考へ方の精確にすると共に、少しでも言葉の數を豐かにしたいといふ希望の現はれであつたことは一つである。コトといふ一語が餘りに包容する所廣汎なる爲に、之を「事」とし「如」とし「形」とし「異」としたなども、其例の中に私は算へて居るのだが、其分化の起つたのが甚だ早いので、ちよつと同意を得にくいかも知れぬ。それよりも卑近な一例はスクモといふ名詞で、これは本來火に焚ける限りの、あらゆる塵芥を意味したかと思ふが、多くの田舍では出來るならば之を籾糠だけに限らうとして居た。だから常陸などではスクモは米の外皮、スクボは糠の燃えたもの又は塵芥、ゾクモは大豆程のことであり、利根川兩岸では或は後者をゾソカラと謂つて居る。奧州と九州とではサクヅは粉糠であり、飛驒や遠州等ではスクベは藁の袴を意味する。奧州の外南部で籾糠のサ

グスに對して、藁の屑をクサダといふのは別の語の樣に聞えるが、松の落葉や其他の枯葉をスクドといふ地域は弘く、中央部にあつて、それを山口縣ではスクヅとも謂ひ、伊勢ではスクダとも謂ふ上に、遠州見附邊では絲などの結ばれることをスクドになるともいふから、是もナメクジをマメクジと區別する程度の語音分化の例に算へてよからうと思ふ。人が第二指を使用して此ツブラ彼處に在るツブラといふ風に、聽き手の眼を引いて話をする習慣から、夜中に爐の火の周圍などに於て、現在其場に無い物を想ひ浮べさせ、又は突如として胸に新奇なる物の形を描かせようとする迄に進んで來れば、單語は當然に細かく配當せられねばならぬから、發音も亦之に伴なうて確實になり、時としては又異常に複雑にもなつたのである。併しさういふ中にも我々は、存外にその同音の混亂を苦にせずして、久しく過ぎて來た國民であつたことは、今でも四聲の辨別も無くこの數多き漢語を使ひこなし、又はどういふ字を書きますかなどゝ、問ひ返して、何かといふと直ぐに眼の助勢を賴まうとするのを見てもわかる。それが我邦の地方言語の上に、如何なる特徴を付與したかといへば、前に胡蝶の例でも說いた如く、土地毎に思ひ／＼の變化ばかり多くなつて、其間の聯絡を見つけ出すことが面倒でもあれば、又興味も多い結果を呈するに至つたのである

る。等しく人間の地上に居ることが、キタダテにもなればアガシミにもなり又[illegible]にもなりといふこと、又はたつた一つの「携へる」といふ行爲が、ニチガス(陸前登米郡)ともなればキ[illegible]カス(飛驒高山)ともなり、又形容詞としてモソボッタイ(遠江小笠)・ムザッテェ(上州利根)・ト[illegible]バタイ(佐渡)・クツワイイ(安藝安佐)・チョコバイイ(日向折生迫)等々と、變へて行かれば行かれたかつたといふのも、言はばそれぞれの移住地へ別れて行く前までは、まだ今日のやうな嚴密なる約束が無くとも、十分に用の足りた時代であつたからである。しかも其間には[illegible]の必要があり、相互の言葉を[illegible]轉移して居る。是が一種の[illegible]の歴史であつて、世界人類の文明を[illegible]かつたことも想像し得られるので、若し此點の言語の成長が、それぞれ[illegible]可能性を持つて居ればよいことこそ、仔細に實情に據つて究めて見ようとする人があるならば、日本[illegible]學ぶべき國であるが、だから[illegible]學者は、[illegible]研究に[illegible]、[illegible]て待つて居ることは出來ぬと、私などは思つて居る。

話は少しばかり横路へそれたが、立戻つてマヒマヒといふ一つの語が、[illegible]僅かに[illegible]の語音の變化をもつて、此の國の[illegible]、南の果は[illegible]名稱をもつて、[illegible]理由の[illegible]

ことを考へて見たい。鍾といふ器が新たに入つて來れば、是にツム又はツンブリと命名すべからし人間の動機は、決して推究し難いものでは無いと思ふ。富山の附近では荷物を頭に戴く者が、其枕に使ふ圓形の藁をツンブリと呼んで居る。壹岐で松毬のことをツングラと謂ふのは、疑ひも無くマツフグリの訛音ではあるが、是とても前に圓い物をツグラといふ風が存在しなかつたら、そんな誤りは起り得なかつたのである。駿河の富士郡では、藁を積み貯へる所謂稻村のことを、ミョウツンブラと謂つて居る村がある。ミョウは即ちニホの變化であるから、此ツンブラも亦圓い形から出て居る。それから心付くと私たちの生れた村で、この藁塚のことをツボキと呼んで居たのも是であつた。伊豆はマイマイツブロをカサパチと謂ふ半島であるが、一方にこの稻のニホをばイナブラと謂つて居ることは前にも謂つた。それも稻村の訛音とも説明し得ぬことはあるまいが、その文學語の稻村とても、實はやゝ宛て字の嫌ひがある。是もツブラといふ語の複合によつて、保存せられて居る例かも知れぬのである。

之を要するに土器の製法に大いなる進化があつてから、ツブラ・ツグラの意味が不明になり、殊に卷貝をツボと名けたる理由を、見出すことが六ずかしくなつたが、幸ひにして未だ其痕跡が、

今も尚色々の方面から、我々の生活經驗を蘇らせてくれるのである。是を海陸の二系統と目することは、或は速斷に失するであらうが、一方に蝸牛を蛞蝓と同じ名に呼んだ土地が、相應に多くあつたに對して、他の一方には亦すべての卷貝を、ツブラと名けたかと思ふ事實は確かにあつた。獨り蝸牛がツブロであつたばかりで無く、三浦三崎などでは榮螺をツボ・カヒと謂ひ、又ツボ樣きといふ複合形に至つては、現に我々の標準語でさへもあるのである。田螺をツボと謂ふ地域は大體に東海道のマイマイ領と同じく、其外側は伊勢の南端及び關東の海に近い各地も、すべて皆ツボ又はタツツブと謂はなければ通じなかつたのは、要するに田に住まぬツボ・ツブがあつたからであらう。それから北に進んで東北六縣の大部分、越後の全部、信濃越中の半分以上が、再び又ツブと謂つて居るが、是も海に近い處のみは特に田の字を付して、他の多くの蜷や螺と差別を立てゝ居る。タニシといふ名稱の支配して居るのは、瀨戸內海の水系と其近隣、即ち略デデムシの領分と一つであつて、それも周邊の地に行けば、夙くもタヌシ・タノシ・タノイシ・タネシなど、變化して居り、九州では更に其外側に、壹岐でも薩摩でも共にタミナの語がまだ行はれて居るのである。壹岐では田螺の名がタミナであつて、別に奧州の八戸など、同じく、一種食用の海の蜷

のみをツブと謂つて居る。漢語抄には海蠃を都比、字鏡には蜅を海都比ともあつて、ツビと發音する例も古くからあつたやうだが、要するにツブもミナもニシも、皆對等の地方語であつた。特に其半分以内の地域に割據するタニシを正しとし、タツブ・タミナを方言として排除しなければならぬ理由には、是といふ文學の背景があつたからでも無い。單に京都が偶然にニシの領内であり人が京都の語を珍らしく思つて、少しづゝ眞似をしようとした結果であつた。物類稱呼を見ると、百七八十年前に既に隅田川左岸の田舍に、蝸牛をヤマタニシといふ新語があつた。越中にも一部分ヤブタニシといふ此蟲の異名が行はれ、常陸は新治郡に單に蝸牛をタヽシといふ土地もあつたが、是などは上總の山武郡で蝸牛をタツボといふと同じく、元は何とかいふ歌の詞があつたのが上の半分を略しても混同の虞は無かつた爲に、再び簡單になつたものと見てよからう。兎に角に昔の人たちの命名法は、餘りにも大まかであり又概括的であつた。それが食用となり若くは遊戲の相手方に任命せられるに及んで、始めて差別の名を必要とするに至り、殊に後者に在つては面白い名、又耳に聽いて容易に思ひ出すのみで無く、いつでも口にし得るやうに一人で記憶し得る名を必要としたのである。單なる符號だけでは足りなかつたのである。即ち蝸牛の名の世を

追うて複雜化したのも、言はゞ此國此社會の至つて自然なる言語の進化であつた。

訛語と方言と

東北地方今日の言語現象が、殊に自分たちの解說し難いものを以て充ちて居るのは、恐らくは今尙些しも研究せられて居らぬ此方面の中古土著の歷史と、隱れたる關係を有するものであらう。其中でも日本海に面した弘い區域のカサツブレが、直接に京洛の文化と略確かなる聯絡を保つて居るに反して、一方嶺を東に越えた北上川下流の地、卽ち夙に獨自の文化を發達せしめて居たと傳ふる部分には、別に一派の方言團の孤立して存するものあるが如きは、之を單なる偶然の事實として、輕々に看過することは出來ぬやうである。此點から考へると、近世府縣の教育者の間に流行せんとした、所謂方言匡正の事業には、實は危險なる不用意があつたわけである。幸ひに其企てが不自然にして、未だ十分なる成功を見るに至らず、寧ろ若干の記錄を以て其亡失を防ぐの力さへあつたが、土語を粗末にして未來の文藝の自由なる取捨に干涉し、更に實地の使用者をして、今一度固有の感覺を味はしめる機會を乏しくしたことは爭はれない。方言は決してさういふ

同情無き態度を以て、一括して排除すべきものでは無かつたのである。普通の外來者が一驚を喫するやうな珍らしい單語が、無意味無法則に出現し、又流傳する道理は無い。殊に蝸牛の如く其使用者が最も倦み易く且つ新奇を愛玩する兒童なる場合に於て、とにかくに大勢に反抗して能く是だけの殘壘を固守して居たとすれば、それには恐らく今日の標準語運動と同じやうな、一種の雅俗觀とも名くべきものが働いて居たからで、實際また割據時代の日本の文化は、必ずしも花の都の求心力のみによつて、指導せられては居なかつたのである。

だから舊仙臺領などでは、最近に至るまでタマグラが蝸牛の本名であつて、之と異なるものが笑はれ又は正されて居た。さうして此語の及ぶ所の領域が、大體に於て御城下の勢力と終始して居たのである。しかも此事實が伊達氏の入部によつて始まつたもので無いことは、それが北隣の南部領の中へ、幾分か入込んで居たのを見ても察せられる。或は山村海隅に在つては多少の例外が見出されるかも知れぬが、自分の知る限りに於ては、其分布は大よそ次の如くであつた。

タンマクラ　「東北方言集」、宮城

タマグラ、タンマクラ　「仙臺方言考」

タマグラ、タンマクラ　「登米郡史」
タマクラ、メンメン　「遠田郡誌」
タンバクラ　「玉造郡誌」
タンマクラ　「栗原郡誌」
カマグラ　「牡鹿郡誌」
ヘビタマグリ、ベココ　陸中上閉伊郡
ヘビタマグリ、デンデンベーコ　同郡釜石
ヤマツブ　陸中平泉
ヘビタマグリ　「御國通辭」、盛岡
ヘビタマ　「秋田方言」、鹿角郡

是が何れも蝸牛のことである。以上の諸例の中で、牡鹿半島のカマグラは明らかに訛語である。仙臺の市中に於ても、近頃は誤つてマヽグラといふ者もあるさうだが、是は多數に反するといふのみで無く、土地の人たちもそれがをかしな片言であることをまだ知つて居る。平泉のヤマツブ

は或は併存の例であるかも知らぬが、田螺は此邊で一般にツブだから、此語は新たにも發生し得、又ごく古くからあつたとしても一向に不思議は無い。其次には舊南部領内のヘビタマツラであるが、是も新らしい訛りでは無いやうに思はれる。仙臺の城下にも既に物類稱呼の頃から、ヘビノテマクラといふ語は行はれて居た。或は烏瓜を「烏の枕」と謂ひ、青みどろを「蛙の蒲團」と謂ひ、ひとでを「章魚の枕」といふ例もあるから、形と大きさとに基づいて戯れに名を賦したと考へられぬことも無いが、若し其方が前であつたならば、恐らくはタマクラとは言はなかつたであらう。タマクラは文語の手枕と近いけれども、東北では別に其名を持つものがあつて、それは我々のいふタマキ(環)のことであつた。例へば蚯蚓の頸にある色の薄い環がタマクラであつた。普通の農家に用ゐられるタマクラは、藁製の圓い輪であつて、藁苞や割竹の類を一つに束ねる爲に、挾差しするやうに出來て居る器のことである。マイマイの螺旋とはちがつて、是は單なる循環であるけれども、物を輪にするといふ點は一つだから、古はたゞ圓い物をツブラといつたのと、同じ程度の不精確さである。蝸牛を斯く呼ぶことが他の土地では早く止み、更に差別の爲にタマキ又はタマクラを、環のみに限ることになつたものとすれば、是は蝸牛に取つては可なり前からの名詞であ

つた。是から南に向つて阿武隈川流域のダイロウ領を中に置いて、福島縣石城の海岸地方にも、マイマイ又はベーコの語と併存して、別に又蝸牛をツムグリといふ例があつた。アホダマは一方にタマグラと近く、又他の一方には美濃などのツンブリとも近い。或は古事記にある都牟刈の太刀のツムガリなども同じで、本來はツグラ・ツブラの第一音が、ツンと發音せらるべき傾向を具へて居たことを暗示するものかも知れない。

蛇と蝸牛との關係には、何かまだ我々の心付かぬものがあるやうである。八重山の石垣島には眞乙姥の墓といふ石棺が露出した處があるが、土地では是を又ツダミバカ（蝸牛塚）とも謂つて、石の下には此貝の殼が一杯入つて居る。蛇が蝸牛をくはへて此中に出入するのを常に見るといふことであつた。自分はまだ實驗したのでは無いが、蛇が此蟲を食物にして居るといふ話は、他の地方でもよく聽く所だから、或は之に關係した昔話なり、古い信仰なりがあつたのかも知れぬが、假にさうで無くとも若し蛇のトグロをもタマグラといふ習はしがあつたら、斯ういふ異名は起り易かつたであらうと思ふ。ツグラとタマグラとの元一つの語であつたことは、決して自分の臆說では無いのである。ちやうど中央部で胡坐をアヅクラ、又はオタグラなどゝいふと行きちがひに

九州の方では之をキタマグラと謂つて居る。例へば

イタマグレ　筑後吉井邊
イタマグラニスソル　同　久留米
イタグラミースル　肥前佐賀市

の類である。さうして他の一方には東北で蝸牛をタマグラ、九州では弘くツグラメと謂つて居るのを見れば、獨りタマクラがツグラの同系であるといふに止まらず、國の南北の兩方に一つの語の行はれて居ることは、恰かもマイマイが東海道と中國とに、カサとカタカタが伊豫土佐熊野伊豆から、飛んで北國出羽の端々にあると同じく、又蛞蝓と蝸牛とを一つの語で呼ぶ風が、津輕秋田と島原半島とにある如く、頗る自分などの假定する方言周圏說を、有力に裏書することになるのである。

東北と西南と

從來の方言區域の論に於ては、單に日本の中央部に近く、稍著しい一つの堺線のあることばか

ら注意せられて、それが他の一方の側ではどういふ結末を示して居るかといふことまで、考へて見ないのが普通であつたやうだが、言語の地方的異同が暈染などの如く、漸次に國の片端から浸潤して來たであらうといふ想像には、實は是認し難い幾つかの論理の跳躍があつた。第一にはこの二千年に餘る國內移動の趨向は、いつでも中央部の人多き地域から、四方の邊土へ出て行かうとして居たことを忘れて居る。九州現在の大姓の過半が、何れも或時代の京人東人の末であつたことを無視して居る。第二には東北方面の言語の特質を、何によつて解說すべきかの用意が無く、時としては未だ確かめられざる異分子の作用を假りて、この變化の原因を究め得るかの如き、國語の統一と相容れざる豫想をさへ抱かしめて居る。九州の隅々には幾つかの古い言葉が、今も殘つて居ることは事實であるが、それが他の一方の端の方にも、殘つて居なかつたといふことは證明せられて居ない。神武大帝の御一行が、後に留めて置かれた言葉だけならばこそ、南九州以外の地には無いといふ道理もあらうが、大倭の御代以來の物言ひであつて、彼地にしか傳はらぬといふものが有らう筈は無いのであつた。要するに是は「古さ」といふ語の不精確に基き、同時に又我々の言語が、次々に分化し增殖したといふ事實を、十分に承認し得なかつた結果に他ならぬ

思ふ。

或は私の問題とする蝸牛といふ一小動物のみが、特に色々の新らしい語をこそ出したゞけで、さういふ異例を以て國語全體の傾向を、測定しようとするのは惡いといふ人があるかも知れぬが、私は單にデンデン蟲の如く多數且つ複雜なる變化をもつもので無いと、滿足に其推移の跡を辿ることが出來ぬから、試みに是を例にとつて北と南との遙かなる一致を說くのであるが、若し必要ならばまだ幾らでも、似たる場合を列擧することが出來るのである。方言は必ずしも中央との比較のみによつて、其意義乃至學問上の價値を、決定すべきもので無いことを論證することが出來るのである。但しこの說明は枝路である故に、今は及ぶ限簡略にして置かうと思ふ。是がもし一つの機緣となつて、將來この細長い島の一方に住む人が、進んで他の片端の生活を考へて見ようとする學問が榮えるならば幸ひのことである。最初に此問題に手を著け始めた人は、沖繩の學者宜野灣朝保氏、次には其志を承繼した伊波普猷君の日琉同祖論であつたが、其後この事業は停頓し、且つ是も亦京都以東には及ばなかつた。自分の試みは只其一部の補充である。東北と西南と、言語のよく似て居ることに何人でも氣の付くのは、ツグラ・タマグラ以外に先づざつと次のやう

なものがある。

アケヅ　上代のアキツムシ、即ち蜻蛉のことである。沖繩の諸島と種子島と東北六縣とのみに此語の遺つて居るのが見出され、中央部はすべてトンボ又はドンブ等、九州にはヘンボ・エンボ等があつて、各地非常なる音變化を以て、東京などのヤンマに續いて居る。奥羽も北の一隅だけにダブリ・ダンブリといふ語が交へ用ゐられ、それが又鹿兒島縣下のボウリといふ語と接近して居る。ボウリも恐らくはツブリの變化であつた。トンボは後には確かに「飛ぶ」といふ語と聯想せられて居るが、最初はダンブリ又は是と近い音であつたことは證據がある。芝居や小兒の遊戲でする翻筋斗、東京ではトンボガヘリといふ行爲を、上方ではドンブリカヘルともいひ又リカドンブリとも謂つて居る。即ち古音が複合の形にのみ保存せられて居るのである。能の狂言のドブカッチリには丼礑の漢字を宛てゝあるが、井の字の中に點のある字を、今は普通にドンブリの語に用ゐて居る。集韻には丼、都感の切、物を井中に投ずる聲とあり、靈異記の訓釋には「丼投彼谷」の丼の字に、ツハトと訓を附してある。大和物語には、ツブリと落入りぬとあり、宇治拾遺にもツブリと打かへりぬと用ゐて居るから（以上俚言集覽に依る）、トンボのダンブリも元はあの蟲の降ら

しい擧動によつた名であつて、多分は童詞などの力によつて、弘く行はれたものであらう。ヘンボ・エンバがそれから出たか否かは別問題として、兎に角に此音の面白さが、次第にアヤツを不用にして、外側へ押遣つたことだけは爭はれない。

ウロコ　是は魚類の鱗のことでは無くて、フケ即ち人間の頭の垢をさういふのである。宮城縣の北部、殊に登米郡などではフケのことをウロコ又はオロコ、青森縣東側に於てもウロコと謂ふから、此分布は可なり廣からうと思ふ。沖繩の島では之をイリキ、倭名鈔にも既に俗に伊呂古と云ふとあるから、若し魚鱗のウロコを保存しようとすれば、是だけの音變化は必要であつたらうが、既に魚類のことをイロクヅとも謂つた例があるから、元は差別が無かつたのである。頭垢をウロコと呼ぶ奥南部などでは、鱗の方はコケと謂ひ、關東でも一般にコケを鱗と苔とに兩用して居るが、伊豫の南端や大分縣の一部では、コケといふのが頭の垢のことであつた。察するにかの伊呂古の「俗語」以前、更に今一層廣汎なるコケといふ語があつて、それを苔又は茸に專用する爲に、一轉して又フケといふ語も出來たのであらう。以上二つの方言は沖繩の學者が既に注意したもので、伊波君は猶この以外に、ツビ(尻)・ナイ(地震)・シシ(肉)・ホソ(臍)・ヨム(算へる)・マル

（糞ひる）・ナス（産む）・コトイ（犢）・サックリ（歳咳）・タグリ（嘔吐）・[illegible]等の語を保つて居られるが、此等の方言一致は決して奥羽の一地方に限られて居る訳故に、是にはまだ其説を敷衍する必要は無い。私は寧ろ此以外、即ち上代の記録に見えないといふ痕跡を留めず、双方が知らずに自分の土地だけの方言と思つて居るものに、尚色々の共通があらうといふことを想像して居るのである。其二三の著しいものをいへば、

クラ　是は今日の雀のことで、沖縄本島が主として此語を用ゐ、普通此小鳥の總称から出たものと想像せられて居る。他の府縣の多くでは、ツバクラ・ツバクロの複合形に存するものゝ外、山がら四十がらなどの所謂「がらの字」に其聯絡を認めるのみであるが、スズメは本来小鳥の總名であつたらしく、特に今日の軒端の雀を謂ふ場合には、まだ色々の附頭語が残つて居る。其中で利根川下流にあるジャノチクラはクラの一例であり、又今日では「聡れる」と称し、或は雀里と解さられるノクラスズメなども、他の一例では無いかと思ふ。それから是は奥羽では無いが、大和の十津川から紀州の熊野、阿波の祖谷山といふが如き非常な山奥だけに、雀をイタクラといふ方言が分布して居るのである。このイタクラのイタは、自分の想像では「語りごと」をすることで、他

の南方の島々のヨムンドリと同じ意味かと思ふ。それから今一つ八重山の諸島に、バードリと謂ふ雀の方言があるが、是は羽鳥であつて此鳥が特に羽ばたきをよくするのを、觀察した者の命名かと思はれる。越中などでは雀をバンドリスズメといふ村があり、バンドリは一種の蓑のことで人が蓑を著た形に似て居るからともいふが、此説明は逆であらうと考へる。蓑をバンドリとしも名けたる動機は、寧ろそれを著て田の邊に飛びまはる姿が、この羽鳥を聯想させるためであつたらうと思ふ。或は、むさゝびの一名をバンドリといふから、蓑をさう謂ふことになつたかの如く思つて居る人もあるらしいが、似た點からいへば比べものにならず、又獸の方が遙かに物遠い。是は恐らく一方が單稱であり、雀は其バンドリにスズメを附けて呼ぶ故に、普通の習はしに準じて此方を後の語としたゞけで、むさゝびも却つてもとはバンドリヤネズミであつたかも知れぬのである。

ミザ　是は地面を意味する古い日本語であつたかと思はれる。文章語の方では大地をもツチと謂つて居るが、別に地表に當るべき一つの言葉があつてよかつたのである。南の果に位する多良間の島などでは、今も明瞭にミザと謂つて居るが、沖繩本島ではミジャと變化して居る故に、ふ

と古くからの一致には心付かなくなつたのである。ミヅといふ語の今でも通つて居るのは、八丈の島と佐渡の島とで、其他にもあるとは思ふがまだ發見せられて居らぬ。他の府縣では通例「地」の漢音と複合して、ヂビタ若くはヂベタといふ語になつて行はれて居るが、是にミヅといふ意味の附くわけの無いことは、誰にでも考へられると思ふ。信州の上水内郡には[illegible]といふ村がある。濕地を意味する所の九州のムダ、それと接續して居る日本海側のヌタなどは、随分古くからではあるが其分化と見てよからう。ニタ又はヌタといふ東國の方言なども、曾て自分はアイヌ語のニタトの繼承であらうと謂つたが、事によるとやはりミヅの同系であつたかも知れぬ。但し東北では濕地はヤチであつて、ミヅに該當する語はまだ心付いて居ない。それから南との二種の一致は、一方が單に沖繩の群島だけである故に、或はまだ之を信じ得ず、何か事を好む穿鑿の如く見る人もあらうが、是から下に掲げる例は、もう少し範圍が弘くなるのである。

ムゾイ、ムゾカ　是は今日の「可愛い」に當る言葉で、沖繩の島では歌にまで使用せられ、島人は現に自分だけの方言だと思つて居る。ところが此語の行はれる區域は、九州は殆と一圓であり、中に廣々とした不使用地を隔てゝ、奥羽の各縣でも亦まさしく此通りであつたのである。但し東

北には今一つメゴイといふ語がまだ残つて居る爲に、主としては之を「ふびんな」の方に向けようとして居るが、それでもまだミジョイとかメジョイとか、少し形を變へて愛らしいといふ意味に使ふ者はある。此風は越後にもあり、又武藏でも秩父郡には、ムジョコイと謂ふ「可愛らしい」がある。九州の方には既にメグシを有せぬ故に、明らかに一箇のムゾを、少しの變化を以て二通りに用ゐて居る。たとへば熊本縣でも南北の端だけはムゾカが「かわいゝ」であるが、城下と其周圍の郡に來るとそれが「かわいさう」の意味に用ゐられ、「かわいゝ」の爲には別にムゾラシがある。さうかと思ふと阿蘇郡はムゾケエ、其東隣の豐後日向ではムゾナキイ、又はムドナキイと謂ふのが「かわいさう」の方である。奥羽の方でも是と同樣で、やはり少しでも定まつた形は無く、單にムゾといふ部分が共通して居るのみである。たとへば仙臺ではムゾイ又はムゾコイ、其附近の郡もモゾイ、南部領內ではムゾヤナ若くはモゾヤダ、羽後の横手あたりはムゾエ、羽前の瀬見温泉はメゾテエ、同じく莊內はミゾケネエが「かわいさう」である。莊內方言考には、ミジョケナイは「見ずに置けない」の意とあるが、さうかと思ふ者は一人も無い。さうして會津の若松では、ムザウサイが又「慘い」の意味に用ゐられて居る。要するに此等は皆可愛らしいと可愛さうとの差別の如

きもので、言葉そのものにはそれ迄の内容は無く、たゞ使ふ人の心持のみが變つて來たので、例する所はカナシといふ語の意味の推移と同じく、愛と憐憫といふものと甚だ近い感覺であつたことを明らかにするまでゞあらう。漢字で無慘なことゝ書くムザンといふ日本語も、是から起つたことが想像せられるのみならず、更に一歩を進めると、ムゴイといふ語も亦元はマゾイであつたかと思はれる。下總香取郡ではムゴイは「可愛い」であり、上總の長生郡では「可愛がる」をムゾガルと謂ふこと、全然奥羽地方のメンコイ・メゴカルと同じである。福島縣でも相馬郡のムゴイ・ムゴンイは「可愛い」に該當し、石城郡のムゴイは「可愛さうな」の方であり、阿武隈流域にはマンゾゴイの「愛らしい」が盛んに用ゐられて、モゴザイといふ語を以て「可愛さうな」の意味に使つて居る。信州などでも上伊那郡の如く、モゴイ・モゴチネエを憐憫の意に用ゐる處と、東筑摩郡の如く「惜い」といふことを、モゲエだのモオラシイなどゝいふ土地とがある。近畿以西の府縣にはマゾイといふ語既に消えて、只ムゴイといふ破片を留め、其代りに今現れて居るのは、漢語とも日本語ともきまりの付かぬやうな可愛いといふ新語である。それが大昔からの存在で無いことは、何人の眼にもわかるのであるが、然らば其一つ前は何と謂つたかといふと、ちよつとは答へられぬやうに

なつてしまつた。それこそ本當にムゲエコツである。

タンペ　是は唾を意味する古語であつたと思はれて、やはり日本の南北兩端だけに殘つて居る。今日普通に使ふのはツソとツバキで、前者の元の形はツ又はツヅであつた。ツバキは全く是とは別系統で、本來はツバのキ、即ち唇の液體の意味であつたことは、唇を九州の北部でツバ、南部でスバと謂ふことゝ、關東以北で唾を別にクタキ即ち口の液と謂ひ、又はシタキ即ち舌の液といふのを見てもわかり、ツバは其ツバキとツソとの一種の混同に過ぎぬといふことは、以前別の論文に之を說いて居る。ところが東北では秋田市と其近郡でタンペ、盛岡と其下流の各地にタンバ・タンベ・タッペ、米澤と其周圍ではタッペ、福島縣北部でもタンペをシタキと併用して居る。それは痰である又は啖と書くべきだなどゝ、さも〳〵輸入の物の如く說く者もあるが、實際の話主はただ唾と同じ意味に、タンペを使ふのだから致し方が無い。或は我々のタンと名くるものだけにタッペといふ語を用ゐる土地もあり、又は一方をタン、他の方をタンペと言はうとする處もあるが、是は全く後々の差別であつて、多分はタンといふ語も斯くの如くにして分化したらしいと思ふ。南の島に於ては首里那覇がチンペ、屋良がトンペ、名護と喜界島とがツンペである。九州に於て筑後

三池地方のツルヘ、同吉井附近のシこちや、ずつと離れた紀州の有田郡の[illegible]がある。最初は多分唾を吐く音から出た語であつて、ツとは關係があり、ツバキ・シタキ等と競爭者であつたのが、後に口から吐くものを二つに言ひ分けるやうになつた爲に、中部日本に於ては割據の状を呈し、タンはたゞ所謂啖だけに、立て籠るやうになつたのであらう。

アクト　是は漢字の踵を以て宛てられる語で、東京と其四周の平原ではカカト、西京以西の普通語はキビスであるが、アクトの行はれて居る區域も中々廣い。先づ東北の六縣は全部、それから越後信州を通つて、美濃尾張の平野にまで及んで居るのであるが、其中間に少しばかりの變化がある。即ち甲州にはアコイ、伊豆にはアックイ、駿遠參にはアクツ・アクトがあつて、西で美濃尾張のアクイ・アクイト等を生じ、近江ではそれがオゴシとなつて居る。カカトは少なくとも是と關係があるらしいが、今はまだ明らかに說くことが出來ない。南の島々では殆ど全部がアド又はアドゥであつて、唯その兩端にのみ僅かばかりのアドといふ地がある。九州では肥後の阿蘇小國、筑後の久留米邊にもアドがあるから、捜したら尚幾つかの類例が見出さるゝと思ふ。

サスガラ　以下は沖繩諸島とは關係が無く、主として九州と奥羽との類似である。虎杖といふ

植物には凡そ三通りの古語があつて、それが奇妙に入り交つて居ることは、是も以前發表したことがあるが、其中で青森秋田の二縣を支配して居るのは、サセドリ又はサシドリなどゝいふ一語であつた。サセドリは一方に又牛の鼻棒のことをもいふから、覺え易かつたのであらうが、ドリには同時にイタドリの下にも附き、更にサスガラともサシボコとも謂ふ土地があるから、サシといふだけが元の形であつたやうに思はれる。それが九州では阿蘇山脈の兩側、豐後も日向の臼杵部も、肥後の山村も共に皆サドであり、又はサドガラとも謂つて居るのは、確かに兩端の一致である。但し此語は中央部に於ても伊勢や備中にサジナ・サジ、ホがある外に、瀬戸内海の島と沿岸では、或は隣のタヂヒ系と交つて、サイジといふ形が出來たり、又はサイタツマの變化かと思ふサイタナになつたりして居るから、聯絡が全く絶えて居るとも言はれぬ。しかも兩端に於て特に顯著に、この類似が見られるといふのは、少なくとも南北の言語關係が、曾ては今のやうに隔絶したものでなかつたことを、立證するに足ると思ふ。

トゼンナ　是は新語の流通が、存外に足の早いものであつたことを示す例である。トゼンといふ語は徒然の音といふより外に、別の起原を想像し得ないのだが、北九州では稍弘い區域に亙つ

て、之を單に退屈といふだけで無く、淋しい又は腹がへつたといふ意味に用ゐて、ヤセキニなどといふ形容詞が出來て居るが、南秋田の海近くの地に於て、自分は直接に其の同じ語の同じ意味に使はれるのを耳にした。但し戸賀や北浦は船著の港だから、是は船人によつて特に運ばれたとも考へられる。實際又彼等が「使ふによい」言葉でもあつた。

デバ　是は全國に行渡つた語であるが、中央の弘い區域では又出刄庖丁とも謂つて、専ら魚を料理する一種の刄物に限つて居る。ところが肥前の五島などでは、デバは即ち小刀のことであり、伊豆の伊東でも伊勢の度會郡でも熊野の南輪內村でも、共に同じ意味に用ゐて居るのであつた。是も沖乘の船からとも言はれるが、此方が實は古くからの用法であつて、反面の鍛冶が打ち始めたからなどゝいふ說は、後に其語を唯一種の刄物のみに、限らうとした者の說かと思ふ。デバは恐らくは右片側に刄を付け、外へ向つて使ふやうにした刀のことで、內へ削り込む方の刄物、たとへば椀作りの用具など、區別をする爲の出刄であつたらう。さういふ元の意味が[illegible]遠くだけに殘つて居ることは、單なる運搬とは考へることが出來ぬのである。

ネバシ・ナラシ　最後にもう一つだけ、是も新たに作つたかと思ふ例を擧げる。ネバシは[illegible]

のことで奥州の突端と、秋田縣の一部とに行はれ、それから南に來れば全然別の語になつて居るのだが、それが九州では壹岐五島、平戸伊萬里から佐賀島原まで、及び鹿兒島縣の一部にも行はれ、豊後の日田では只ネバと謂つて居る。ネバスの動詞は今日では餘り聽かぬが、引伸ばすといふことであつたらしい。それを其まゝ物の名にしたのである。ナラシも西國の略同じ區域に於て掛竿衣紋竿衣架の類をさう謂つて居り、紀州の日高郡や阿波の祖谷山でも其通りであるが、是が東國に來れば東上總では稻を乾す竿、關東でヲダカケとも謂ひ、北國その他の廣い區域に於て、ハサ木ともハデともいふもの丶名になつて居る。下總常陸の方ではそれがノロシと變化し、衣架や手拭掛けには別にソゾ若くはミソゾといふ名があるが、この東西兩端のナラシは、本來一つの言葉であつたことは疑ひが無い。ナラスは普通「平らにする」といふ意味で、又次第に其方に改まらうとして居るけれども、元は農村の作業に屢々用ゐられた語であつたことは、ナルが平地を意味し、ナルイが傾斜の緩なることを、形容して居るのを見てもよくわかる。鮓がなれるといふのは低く平らになることであり、それを又ネマルともスエルとも謂ふ所から考へると、人に馴れるといふ語が出來たのも是と關係があり、漢語とは起原が別であつたやうである。兎に角に動詞の

此形を以て、其目的であつた物の名とする風は、以前今よりも遙かに盛んであつた一時代あれたかと思はれるが、其名殘が亦國の南端のみに留まつて居るので、此例はまた後々も見出されるであらう。米を洗つた白水をユマシといふなども、中部では今も耳にする語であり、又我々には耳遠くさへ聽えるが、是も九州の北部と關東信州との田舍には行はれて居る。斯ういふ明白な後の世の言葉までが、尙かけ離れた二地の類似を見るといふことは、假令一半は偶合の奇蹟とすべきものだとしても、少なくとも國中の方言が常に獨立して、自由なる選擇に走つて居たものだとする、空想を破るには足るのである。單に一個のマイマツブラ及びツブラメの問題では無かつたのである。

都府生活と言語

問題の幾分か複雜になり、從うて又諸種の異說と獨斷とを招き易かつた原因は、個々の昔の方言領域が、外部の競爭者の侵略を受けて、次第に退縮すべき傾向を持つて居たばかりで無く、內にも亦往々にして新らしい異稱が起つて、それに押分けられて相互の脈絡が絶え、各自異なるの

進化の道を、歩まなければならなかつたことである。蝸牛には幸ひにして、カタツブリの如く、曾て京都を占領して今は邊陽に餘喘を保つ例があつたからよいが、若しタマグラとツグラメとの對立だけであつたら、中々斯う容易には比較を進めて見ることも出來なかつたであらう。ましてや新語發生の中心が一方に偏在して、所謂方言圏の他の周邊が、遠く無人の海又は沙漠に消え去るやうな場合には、事によると僅かに片端に殘つた舊語を以て、外から來て附いたものゝ如く、或は又古調が此方面のみに保存せらるゝが如き、裾模様式淺測觀を抱かせぬとも限らぬのである。此危險の殊に多かつたのは沖繩の列島であり、しかも最も早く其誤謬に心付かれたのも亦彼地であつた。單に遠近を地圖の上から見れば、勿論誰とても內地の影響が、より多く北境の大島々群に及ぶべかりしを想像するが、事實海上の交通の主として舵を向けたのは、島尻の一角即ち那覇から牧港までの海岸であつた。それ故に今でも言語の敷波は、略この地點を中心として、南北に其波紋を擴げて居て、宮古は國頭の山村と相應じ、八重山は所謂道の島々と遙かなる類似の痕を持つて居たことが、追々に發見せられんとして居るのである。是と同種の傾向が、弘く日本全體の上にも現れて居なかつたといふことを、斷言し得る者は無い筈である。たゞ今日はまだ調査が

周到で無く、且つ稍大なる島の陸續きに於ては、一層と相互の交渉が込入つて居た爲に、是を簡約なる法則に導くことが出來ぬのであるが、それには又別に一個の觀察點の、我々の希望を繋けんとするものがあるのである。

是を言語の文藝的進化と名けることは、少しく耳馴れぬ稱呼ではあるが、恐らくは實地に當つて居ると思ふ。古人が好い言葉又面白い言葉として、採つて在來の用語にして居るものは、假令我々の鑑賞からは眉を顰めるやうなものであらうとも、必ず其當時の形容の機智に富んで又聯想の新奇なりしに、當時の人心を動かすの力があつて、一回の選擇は即ち又一個の技巧であつた。中には世情の變遷によつて、輕しめ忘れられた場合も無いとは言はれぬが、少なくとも[illegible]に複雜より單純に戻るといふことは無かつたわけで、さうすると國の端々に殘り留まるもの、如何なる過去を談ずるかも、大よそは豫想することが出來るといふ結果になるのである。ところで當つての一つの問題は、奥州のタマグラ九州のツグラメが、古いといふことは[illegible]か、それがマイマイやカサと複合して、今の各地の方言を作つた事實は、假に此語が前からあつたことを示すとしても、果してそのもう一つ以前が、單なる無名であつたかどうか、答へられなけれ

ばならぬのである。それには前章にも試みられた如く、やはりそれぞれの方言領の、邊境現象を見て行くのが一つの手段である。カサ・マイマイ其他の新語が、既に九州の周邊に入つて居ることは之を例示した。ところがツグラメの方はそれと反對に、今尚その中央山嶺の周圍に一團の版圖を有し、それが又南北に進出するにつれて、少しづゝの轉訛を見ようとして居る。のである附表にも載せてあるがもう一度爰に列擧して見ると、

ツグラメ	肥後阿蘇郡
ツグラメ、ツクラメ	豐後南北海郡
ツングラメ	日向東臼杵郡
ツングラメ	豐前宇佐郡
マメツングリ	筑後三潴郡
ツンツングラメ	同上
メエメエツングラメ	肥前佐賀附近
ツングラメ	同上

ツブラメ	壹岐島
ツルマメ	肥前平戸
ツヾガメ	同五島各地
ツッガメジョ	同上三井樂
ツグラメ	肥後葦北郡
ツグラメ	鹿兒島
ツグラメ	薩摩甑島
ツンナメ	大隅種子島
ツンナメ	七島寶島

さうして此中間には蝸牛をナメクジといふ地域を包圍し、そこには又ノウトメクジ・マワノヤメナメクジ等の名を生じて居るのだから、貝の殼をツウといふ點までは、是も亦同じ配下に在つたものと見られる。しかも此地方では、單なるツグラは「椀」のことであり、又は蛇のトグロのことであつた。蝸牛の方には悉くメの音が附添して居る。それを伊豆などのカリンマイと同様に、後に

現れ來りしマイマイの影響と見るか、但しは又今一つ以前のミナ若くはニナといふ名稱が、爰にも殘存してツブラ蝸といふ、一種の複合を生じたものと見るか。はた單なる動物呼稱、たとへば樗木縣や八丈島の「蛇め」「牛め」の類と見るべきであるか。この判斷は頗る重要となるので、それには更に我々の觀測を、もう少し外側に向つて伸展する必要があるのである。

薩摩の一隅のツグラメが又一つの海を越えて、種子・寶の島々のツンナメとなつたことは前に見えて居る。それから南の方も系統は大よそ一つかと思はれて、

チンナン	首里那覇及び周圍
チンナミ、チンナンモー	沖繩本島名護
チンニャマァ	奄美大島北部
チンダリ	同上大和村
チンダリィ、チンニャマ	同上古仁屋
チンダミ	加計呂麻島各地
チンナミ	沖永良部島

ツンミャウ　　　　　喜界島

などの例がある。サ行とダ行との通用には、此比較によつても想像せられ、一方サ行がタ行と代りをすることは、熊本鹿兒島兩縣下の普通であるから、マシナチャが一旦種子島その他のマシャと爲り、更にチンナンを經てチンダミにまで、轉訛して行つたものとも想像せられることは無いところが其比較を尚押進めて、南の方八重山群島の事實を尋ねて見ると、其想像の幾分か困難になることを感ぜざるを得ないのである。現在知られて居るだけの例では、蝸牛の方言は

チダミ、ツダミ	石垣島
チンダミ	小濱島
チノヅァン	西表島
シダミ	黒　島
シタミ	波照間島
ンダミ	與那國島

けだし黒島波照間島のサ行轉音は、顯著なる此島々の癖であつて、決して此場合ばかりに限ら

れたことでは無い。例へばキヌ(衣)を沖縄本島の南部ではチン、北部國頭の山村でキン又はキヌといふに對して、この二島では之をシヌと發音して居る。だから簡單に是ばかりの事例に據つて別に蝸牛の名にシタダミの一系統があつたことを、推定することは短慮であるかも知れぬが、類型は遠く飛離れた伊豆の八丈島にもあつて、彼處では現に蝸牛をヤマシタダミと謂つて居るのである。即ち若し曾て我邦の内に此語があつたとすれば、シダミ・チンナミは九州のツグラメよりも、遙かに此方に近いことを認めなければならぬ。それから今一つの可なり注意すべき事實は、この八重山の諸島の中で、たつた一つの新城の島だけが、古來土器を燒いて隣島と交易して居た。その現存して居る實物を見るのに、無數の細かに碎かれた貝の殼が、其土の中に交へ燒かれて居る。是は全島が珊瑚岩であつて、原料の粘土を得る途が無い故に、多くの蝸牛を共に搗き潰して其粘液を以て赤土をこね上げ、大きな水甕などまでを作つて居たのである。是が原始工藝史の重要な一つの問題であること、稀に土器の使用を解する太平洋の小さな島々でも、或は同種の方法に由つたものがあるらしいことは、他日改めて之を說くとして、先づ差當つてはシタダミといふ語が、何か此習俗の間に其起原を持つのでは無いかといふ、想像說だけは提出して置く必要があ

る」即ちナメクジの「ぬめり」を以て認められたと同様に、シタダミは即ち「したたみ」に外ならぬ、此名を負ふに至つたとも、考へられぬことは無いのである。假に其推察の通りであつたとすれば、其器との因縁は又一段と古くからあつたわけで、從うてツブラ・ツブラの語が其製法の特質から出て來たといふことも、殊に自然であつたと考へられるのである。

沖繩本島の蝸牛は現在はチンナンであり、絲滿人は是をジンナンとも謂つて居るが、前には寶島や種子島の如く、ツンナンと謂つた者もあるらしく、小野蘭山氏の周到なる調査の中には、蝸牛、琉球に於てはツンナンと謂ふ。其形扁螺（シタダミ）の如くにして殻薄く碎け易く蓋無し。形扁なるものをヒラツンナンと謂ひ、殻厚なるものをバノツンナンと謂ひ、又殻厚くして尾尖り、斑文あり又圓醫あるものをフタツンナンと謂ふとある。是は傳聞であつて必ずしも精確を信じ難く、殊に同じ條下に、一種尾高くして出巨無きものをユノガホと謂ひ、その特に高きものはヤマアゲユフガホと稱すとあるのは、或は沖繩の事實で無いかとも思はれるが、しかも此島に於ては夕顔をツブルと謂ひ、現に伊波普猷君の談に依れば、一種山中に棲息する蝸牛にはツノルと名くるものもあるといふことで、少なくとも沖繩人はツブルが蝸牛の方言の一つであることだけは知

つて居たのである。是から推して考へて行くと、若しツンナンがツグラメの轉訛であり、チンダルが假にシタダミの系統に屬するものとすれば、二つの方言領の境は沖繩本島から逆に北へ戻つて、奄美大島と其屬島との間及び同じ大島々内でも北端から四分の一ほどの處に、一本の堺線が引かれることになる。之とは反對にツンナンも亦シタダミの方の影響だとすると、今度は又九州主島と種子島との間の海を、堺としなければならぬのであるが、何れにしてもそれは想像のしにくいことである。それで第三の私の意見では、當初全然別ものであつた二つの方言が、爰でも其の接觸面に於て一種の複合現象を呈し、兩名相牽制して中間にこの特殊の形態を發生せしめたものと解するのである。他の地方の方言邊境にも、デエボロだのツノンダイシヨだいゝ如き、音の複合を生じた例はあるが、多數はカサツブレやマイマイツブロと同じく、語形の一部を保存したものであつた。それが海南の島々に於て、專ら音の調和によつて次々に新たなる語形を生じて居るのは、之を果して訛語のうちに算へてよいかどうか。思ふに其原因の主たるものは、前代の單語が甚だしく簡單であつて、之を後世の童詞に利用せられたものに比べると、遙かに符號化することが容易であつた爲では無いか。或は又新語の出現する機會が乏しくして、いつ迄も意味不明

なる古語を守つて居た結果、徐々の音變化に向つて比較的無關心であつたからでは無いか。別の語を以て言ふならば、雅とか誤謬とかいふ個人に屬する理由以外、他に尚必然に之を發生せしむべき社會的狀勢があつて、それがちやうど方言の次々に出來る理由とも、表裏兩端に相通ずるものでは無かつたか。假にさういふ推測が成立つものとすれば、國語の成長を説かうとする人々は、今少しく細密に是と文藝生活との交渉を、省察して見なければならなかつたのである。

そこで立戻つてもう一度、この九州諸島の弘い地域に、何故に單純古風なるツブラ・ツグラが今も殘り、更に其外側には尚一段と古いシタダミが、どうして又痕跡を留めることになつたかを考へて見る。私の説明は或はまだ概括に失して居るかも知らぬが、これは要するに國民の移動定住の樣式如何が、國語そのものゝ形態の上にも、亦無關係であり得なかつたことを意味するものと思ふ。人が都邑の生活を開始するに及んで、始めて心付かれるのは安逸の價値とも名くべきものであつた。澤や磯ばたに別れ〳〵に住む者ならば、主たる休息方法は飽滿か睡眠か、その他には無かつたらうが、別にそれ以上の色々なる閑暇の利用法があつたことは、經驗境遇の互ひに異なる人人が集まつて、それを比べて見ることによつて始めて學び得たのである。たとへば眼の樂しみ

りは耳の愉快の方が、容易且つ小規模に之を求め得られるといふことなどは、それ迄は殆ど知る機會も無かつた。勢力ある階級の我儘なども、實はこの籠居後の發見によつて、始めて大にそゝのかされることになつたのである。上代から傳はつた莊嚴なる多くの唱へごと語りごとが、次第に年一度の宗教儀式から引離されて、平時にも之を試みんとする者を生じたのも、つまりは酒杯や歌舞の獨立と同樣に或は又自ら生産せざるものゝ消費と同樣に、何れも都邑群住の花やかなる影響であつた。それが恐らくは文學の濫觴であり、又昔話がその信仰上の意義を失うて、凡人平常の退屈を慰めるに至つた原因である。言語を變化ある精彩ある耳の食物たらしめた事業の如きも、其以前には只少數專門の徒の管理する所であつた故に、勢ひ其效果の大を期し得なかつたのであるが、一旦異鄕の者が相往來し、又互ひに自ら紹介しなければならぬことになると、其技藝は是が爲に解放せられ、且つ大に進化するの必要があつたのである。是が現代に持續した都府の魅力、所謂都會熱の隱れたる病原であつて、九州奧羽は乃ち稍その中心が遠かつたのである。獨り「京おらんべ」のみが都では模倣であつたのでは無い。新を喜び古きに倦む氣風、機智と練習とを以て物言ひの變化を促さうとする努力が、一般に繁華の土地にのみ尖鋭であつた爲に、其反面

から偏部と名のつくやうな地方には、多くの古いものが保存せられたのである。單に上世の民族遷移の道筋であつたが故に、袋から物のこぼれる様に、ほろ〳〵と落散つて居るものと解するのは誤りであらう。若しそれだけの原因からならば、鎮西に稀に皇都東征の代の單語が、遺留して居た理由にはならうが、それが數十世紀を持ちこたへて居た説明としては不十分である。ましてや鎌倉室町乃至は江戸初期の新語が、分布して居る不可思議を釋くことは到底出來ない。しかも一方には東北の邊土の如く、まだ一度も我々の中堅が足を踏み入れなかつた地域にも、同じ様な痕跡は見られるのである。是を解説する方法は恐らくは一つしかあるまい。一言で言ふならば、ノグラメ・タマクラでも差支無しと思ふ者ばかり多く住み、それを古臭いとか分らぬとか言つて、嘲り又は嗾かさうとする者が、滅多に遣つても來ず、來ても新らしい語を採用させる途を知らなかつたのである。小兒は勿論大人よりも遙かに外部の慫慂には敏感であつたらうが、彼等の活躍は通例模倣の外には出でなかつた。群の力がその周圍を押へて居れば、さまで頻繁なる新語の感化を受けずにも居られたものらしい。だから街道の交錯した中部日本の平地のみが、殊に方言の烈しい混亂を經驗し、千船百船の寄り湊ふ海の港などは、案外に在來の統一を保ち得たのであつた。

併し是とても勿論程度の問題で、如何に律義にして氣働きの無い村の人たちでも、新たなる事物には新らしい言葉を求めた如く、それ相應に各自の生活の要不要に從つて、變へてよいものは徐々として變へて來た。たゞ其動機が遙かに他の一方のものよりも著實であつて、單に感覺によつて氣輕なる取捨をすることが出來なかつた。それが中央からの距離と比例して、外へ行くほどづゝ方言の壽命が長かつた理由であつて、さういふ邊土の言葉とても、亦決して單に古いから殘つたわけでは無いと思ふ。

物の名と智識

この意見をもう少し詳しく說明する爲に、最後に尙一つの小さな問題を提出して置く必要がある。それは九州のツグラメの末の「メ」と、八重山諸島の語の元の形らしきシタダミの「ミ」と、果して關係があるか否かといふことであるが、私は現在はほゞ有るといふ方に傾いて居る。其理由は至つて簡單で、つまりはこの二つの單語以前に、更により古い一語があつたものと、考へて見る結果である。日本南端の平和無爲の島々に於ても、蝸牛の名は少なくとも一度は改まつて居る。

さうして其痕跡が明瞭に今も殘つて居るのである。所謂三十六島の中に於ては、宮古のツンナ又はヴッナのみが、外形は稍似て居るけれども純然たる別系統のものであつた。尤も此群島だけは過去に種族の盛衰が殊に激しかつた爲に、今尚獨立した幾つかの方言圏があるさうで、自分はまだ其片端しか知つて居ないのであるが、少なくとも古來ミヤコの中心と目せられた平良在々部落に於ては、蝸牛をンムッナと謂ひ、之に對して蛞蝓をムナンヤムシ、若くはムナゾイムシと謂つて居る。卽ち蜷拔蟲若くは蜷取蟲の義であつた。宮良當壯君の採訪語彙稿に、之を「蝸牛を拔いた蟲」と解說して居るのは、同じ意味であらうが甚だ明確を缺いて居る。卽ち同君はムナが卷貝の殼の總稱であることを、まだはつきりと認めて居ないのである。

蝸牛をミナといふ例は、九州南部には殘つて居る。鹿兒島縣方言集を見ると、何れの土地でとも明示しては無いが、蝸牛には(一)ミナムシ、(二)ムナムシケ、(三)ヤミナ、(四)ユダイクイミナ、(五)カキミナ、(六)チヂミナ等の異名行はるゝことを示して居る。多分はツグラメと併存して居るか、さうで無ければ同類異種のものに、特に此名を付與して居るのであらう。此中(一)は僅かにムシの語を添へて海の蜷と區別し、(二)はそれに又貝の字を附加して居る。(三)のヤは

ナは人家近くに棲む故か、はた又出入をする殼を家と見たか。何れかは判然しない。(四)のエダイクイミナは蚚蝓のヨダレ蟲と同樣に、涎を垂らすからの名であることは疑ひ無く、(五)は垣蜷であり、(六)のチヂミナは頂蜷であつて、常に樹上に遊ぶことを特徴と認めたものと思ふが、或は尙シジムシといふ土地もあるといふから、別にシタダミ系からの轉訛とも考へられぬことは無からう。薩摩川邊郡の知覽鄉などでは、現在も蝸牛をヤマミナと謂ふさうである。小野氏の本草啓蒙には同國竹島に於て、尋常の蝸牛の殼厚きものを、ヤマミナと謂ふと誌して居る。山蜷はちやうど陸中平泉のヤマツブなどゝ對立すべきもので、之に據つて直ちにミナが卷貝の總稱であることを知るのであるが、一方には宮古島の如く、之を以て蝸牛ばかりの名とする例もあるのである。八重山群島の石垣島に於ては、ンナは卽ち金字塔貝のことだと宮良君は報じて居る。金字塔貝とは多分高瀨貝であらうが、それならば鹿兒島ではタカシイビナと謂つて居るのである。

單なる一種の淡水產の卷貝に、ミナ又はニナの名を付與した例は他の府縣にも多い。倭名鈔には河貝子を美奈とあり、ミナ結びニナ結び孰れが正しきかの論は、旣に徒然草にも見えて居るから、相應に夙くから其習はしはあつたのである。海に遠い飛驒の吉城郡では長螺をニラ、丹波い

福知山邊ではニナイ、備前の一部ではニダ、佐渡では一般にヒンナと謂ふやうだが、單に其土地土地で著名なる一種に、ミナの總稱を寄託した迄で、果して同種であるか否かは檢査の上で無いと決しかねる。併し大體に食用に供せられる爲に、此通り著名になつたものと思はれるから、それが假に一致して居ても別に不思議では無いわけで、其爲に此貝だけが固有のミナであつたとは言へない。會津の大沼郡の方言集には、ビナとは宮入貝のことだと謂つて居るが、是も亦同じ川蜷である。加賀以東の北國各地に於て、ビンロウジと謂ふのも亦ビンナの訛語であるらしい。後には更に一轉して、此貝の形に似た尻の尖つた燗徳利までを、ビウリウと名けて居る故に、元の意味が一層不明になつたのである。

或は又伊豫地方のやうに、特に右のミナ卽ちカハニナと謂ふ例もある。伊勢の度會郡では之をコナ、紀州南牟婁郡神川村などはゴニラ、豐後の日田郡でコウヒナと謂つて居る。ゴウナは肥後の玉名郡で細螺卽ち東京のキシヤゴのことであり、遠州濱名郡庄内でも、海に居る一種の蜷貝をゴウナイと謂つて居る。寄居貝卽ちヤドカリの住む貝のみを、ミヤナと謂ふのは普通であるが、是とても一旦川蜷の名を經てから移つたものかも知れない。現に下總の利根上流では、ナ

ウナイは小川に棲むキセル貝のことであつた。下野河内郡では之をカハジラと謂ひ、嶺を越えて福島縣に入つて行くと、弘くこの同じ蜷をカンニュブ、又はガンニュウボウなどと謂ふのであるが、是も恐らくは亦カハビナの轉訛であらう。山形縣の最上地方では、之をミュウゴップ又はミュウゴカエと呼んで居る。前のカンニュブと地域も接近し、外形も「川」の語を除けばよく似て居るが、果して類推が許されるかどうか。兎に角に此語は越後新發田のニュウニュウや、越中各地のミュウミュウを中に置いて、遠く加賀能美郡などの蝸牛の方言、ミュウゴとの連絡が付くのであつて、此關係はちやうど又沖繩縣下の、チダミ・ツンナンのそれと似て居るのである。

川蜷を又或はカハダニシと謂ふ處がある。海とは緣の無い奈良縣などがそれである。タニシは九州の全土に亙つて、川蜷といふ方が通則である。壹岐でも鹿兒島宮崎でも共にタミナ、奄美大島ではタンマとなり、沖繩諸島は概してタァンナになつて居る。さうして日本の東半分がタッブ又はツブであることは前にも言つた。何れも皆田に棲む卷貝といふ趣旨は一樣であつて、特にニシだから他のミナ又はツブよりも精確だといふことは無かつたかと思ふのであるが、各地現在の用例に就いて見ると、ミナは幾分か其範圍が廣くなつて居る。例へば奄美大島では法螺貝はハラァナ

或はブラミナと呼ばはれて居るが、貝は卷貝に限らず全體がすべてニナである。沖繩本島でも[illegible]などは、鰒「アハビ」のことをカタゲニナと謂つて居る。卽ち片貝蜷の意である。此人たちは貝殼のことをミナガラと謂ひ、八重山の石垣島では之をンナグルと謂つて居る。大島の古仁屋では貝の柱をさへも、ミナハアラと呼んで居るのである。それが果して後代の不當なる擴張であつたか、但しは又最初には何でもかでも、介類は皆ミナであつたのが、追々に外から狹められて、適用の範圍を「蜷」のみに限ることになつたものか。それを決して置いてからで無いと、語原の攷定などは不可能であるのみならず、マイマイとの關係もまた不明を免れぬのであるが、實際はまだ十分なる證據が雙方共に無い。只幾分か後の解釋に有利なのは、貝の總稱をミナ・ミナンなどゝいふ區域は、北は道の島から南は終端の波照間島まで、今尚廣大な地域を控へて居ることと、この日本語のカヒといふ言葉が、古く器物を意味したケといふ語と通用して行はれて居て、必ずしも貝を利用し始めてから後に、出來たものでは無いらしきことである。それが若し確かめられたならば、ミナの中でもカヒ卽ち器物に應用することの出來る形のものだけをカヒと呼び、其殘りを元のままにミナと謂つて居るものと解し得られる。但しその貝を意味するキャウといふ語は、現に八重山

の諸島にもあつて、それを後に入つて來たものとも斷定することが出來ぬのである。

そこで再び前の問題に立戻つて、ツグラメ・シタダミが果してツグラミナ、又シタダリミナなどの複合形では無いか否かを考へて見る。南方諸島の類例を援用することは、馴れぬ人にはまた不安の種であらうから之を略し、單に九州一帶のツグラメと、鹿兒島縣内の山蜷垣蜷等とを比べて見ると、前者が後れて發生したことだけは、深く論究する迄も無く明白である。卽ち形さまざまなる水陸のミナの中で、特に圓らなる一種を指定したツグラメの語のある以上は、今更ミナムシの名を設けて、是に色々の差別の語を附添するの必要は見ない筈である。しかも目に觸れる物があつて之を呼ぶ言葉が無かつたといふ時代は想像し得られぬから、旣に何とかいふ蝸牛の名があつた處へ、新たに次の語は持込まれたのである。それが或年月の間併用せられて居たか、又は稍急劇なる新陳代謝が行はれたかは、場合毎に必ずしも一樣で無かつたらうが、假に著しい人望の差等はあつた迄も、耳で聽いてもわからなくなつてしまふには、少なくとも人の一代はかゝつた筈であつて、是が私の音複合乃至は語形複合の完了したらうと思ふ期間である。曾て存在して次のものに打倒された語が、果して何であつたらうかは誠に定め難い。しかも話主の新語に對する

態度は區々であつたものとすれば、新舊の方言領域は往々にして食ひちがつて居たとも考へ得られる。即ち最も多くの場合に於て、一つ以前の方言を其周邊の地に見出し得べしとする所以である。奥州のタマグラはより簡單なる隣の語を持たぬに反して、九州のツグラメには其外側にミナがあつた。蝸牛をミナとは謂はぬ土地にも田ミナがある。さうして他の一方には中部以東に、今尚ツブラといふ形が色々として傳へられて居るのを見ると、ツグラメは即ち一種の邊境現象では無かつたかと思はれるのである。シタダミの方には、また十分なる比較の資料が得られぬから、是も同樣の過程があつたことを推測するに止まるのであるが、少なくともカサツブリとマイマイツブロだけは、事情が全く此通りであつて、たゞ其時期のみの異なつて居たことを見れば、私の推定は必ずしも粗暴でないと思ふ。

是等の事例を綜合して見ると、前からあつた語は古臭いといふだけで無く、又單に意味が把へにくいといふに止まらず、概して其範圍が不精確であつた。物の名は符號だから意味などは構はぬやうなものだが、前代人の智識の修得には、今日の如き教科書も無く、文字も無く又繪も無かつた。現實に其物を手で押へて居る場合を除くの外、名を知ることが唯一つの物を支配する手段

であつた。それ故に人は各自の實名を隱し又は諱んだのである。それ故に又甲乙人の交通に際しては、少しでも具體的に又印象の深い名を知つた者の方が、常に有利な地位を占め得たのである。人に綽名が付くと忽ちにそれが流布したり、土地には誰がきめるとも無く、次々に細かな地名が付くと同じ樣に、人と物との關係が濃厚又密接になる程づゝ、いよ／＼より適切なる名が求められることになつたのである。蝸牛は内地に於てはいつ迄も單に兒童の遊び相手に過ぎなかつた爲に、其名の變化も幾分か氣まぐれな方向を取つたが、同じ法則は更に農作物や農具、乃至は漁獵の目的たる魚鳥獸にも及んで、たとへば鍬ならば唐鍬備中鍬等、鯛ならば小鯛とか黒鯛とかいふ風に、段々に聽いて直ちに性能を知り得るやうな、複雜なる新名と代つて行かうとしたのであつて、小兒が蝸牛に對する場合も亦、大人は省みないがやはり言語の最も活き／＼としたものを、常に撰擇して行く念願はあつたのである。それを後世の長者の立場から、彼是批判することは到底出來ない。故に概括して之を「生活の要求」といふことは少しも差支が無く、過去も將來と同じやうに、世の中の事情が進展する以上は、言語は結局いつも變遷しなければならなかつたわけである。

方言周圏論

さて結論として改めて言ふべきことは無いが、餘りに複雜した私の論議であつた故に、今一應是までの假定を要約して、豫め後の批評家の親切に報いて置きたいと思ふ。

蝸牛はこの日本の島に、多分は日本人が渡つて來るよりも前から、住んで居た動物であつた。其遭遇の最初の時から、既に何かは知らず名があつた。今日知れて居るものゝ中では、ツブリといふ語が一番古いらしいから、假に我々は前の故郷に於て、斯ういふ動物にも一時は稱呼を持つて居たと想像して置くが、此想像は事によれば破れるかも知れぬ。さうすると少なくも蝸牛だけに於ては、語音の親を迎つて遠方の同族を探すことが出來ない。何となれば他は悉く此國に上陸してからの發生だからである。

例へばナメクヂを以て二種の蟲を併せ呼ばうとする風なども古いかも知れぬが、一旦蝸牛は別の名があつた場合に、それを廢罷して他の物の名を借用するといふことは、想像しにくいことゝせられるからである。しかも此風は全國に弘く行渡り、又現在も相應に強い根をさして居る。どちらが

本の主であつたかは容易に決し難いが、とにかくに其中の一方しか知らなかつた土地から、遣つて來た人があるのかとも考へられる。但しさういふ場合が假にあつたとしても、それはたゞ同時に二通りの名を知る者が、相隣して住んで居たことを意味する迄で、ナメクヂ後改めてミナと稱すと、推斷することはどうしても出來ない。海に働き海の渚に住む人々は、現に蝸牛以外の多くのミナを知つて居て、追々に之を差別しようとして居たのである。或は相參酌してミナナメッジ、若くはナメクジミナといふ名は作り得たかと思ふが、さういふ形はもう何處にも殘つて居らぬ、僅かにツブラの語が始まつてから後に、二つの是と複合したらしい痕跡を見るだけである。事によると是は異なる職業又は信仰を持つ者が、互ひに他方の用語を避けなければならなかつた結果かも知れぬが、さういふ事實を明らかにしようとするには、勿論尚幾つもの同種の例を見付けてかゝる必要がある。差當つては只この奇異の事實を、注意して置くより他は無いのである。

ミナと名けてよい貝は非常に多かつた。或はもと一切の貝類がミナであつた時代さへ想像せられるが、そのうちにカイと呼ばるゝものが先づ分れて、蜷即ち卷貝のみをミナといふ樣になつた。我々の生活交渉が特にその或一種に向つて深く進むと共に、次々に之を他のものと差別する必要

が生じた。蝸牛は其中のシタダミといふ蜷の名に統括せられ、更に他の普通のシタダミと區分する爲に、山シタダミなどの名を付せられたこともあつた。其新名が是れだけの區域に及んだかは、素より現在の分布によつて推察するわけに行かず、又今後の採集が更に資料を附加へるかも知れぬのであるが、一方にミナの單名も猶行はれて居るのであるから、この方言は大體に於て殆ど展開せず、結局は多分純然たる地方語として終始したこと、思はれる。

之に反して其次に起つたツブラの方は、一旦は全土を席卷したこともあつたかと思ふ。人が此物を話題とする場合が意外に多くなつて、先づ其形狀に就いて興味を感じた者が、是に付與するにツブラ又はツグラの名を以てした。此形容は土器の以前の製法に親しむ者に、殊に適切なりと認められ、又その語音の新らしさを愛づる者が多くなつて、程無く國中の大部分に亙つて、シタダミ其他の河蜷を不用にしたのであつた。

このツブラの優勢なる名望が、一朝にして覆へし得べきもので無かつたことは、今日も尚幾多の證跡を指示し得られる。しかも世上には既に日用以上の言語を、貯へて置かうとする氣風が現れて來た。時と目的に應じて少しでも自由に、用語の選擇をしようといふ希望が強くなつて居た。

方言といふ言葉がもし同時に二つ以上の單語の併存することを意味するならば、それが明確に國民によつて意識せられたのは、恐らくは此時から後のことであらう。しかも其撰擇には殆ど以前と同じ樣に、實際は可なり强烈なる偏頗と模倣とが働いて居た爲に、其一つ以外の語は久しからずして忘却せられ、結果に於ては頻々たる地方語の、榮枯盛衰を見ることになつたのである。此意味から言ふと近世の俗語の大部分は、其成立ちが可なり以前のものと違つて居た。即ち最初は必ずしも舊語を改訂しようといふ迄の趣旨では無く、單に一異名として斯うも謂はれるといふ心持で、用ゐ始めたかも知れぬのであつた。しかも結局はその一つのみが大に行はれ、次第に他の多くを死語老語に、押遣つた事實は同じである。

世には方言のあまりにも區々なる變化を見て、驚き恠まうとする人が多いけれども、一たび此事實を知れば此方は寧ろさもあるべしとも言へる。それよりもこの各地思ひ〳〵の、しかも豫定の計畫でも無かつた言葉遣ひが、永く是だけの端々の一致を保つて居た理由こそ、說明せられなければならなかつたのである。たとへば小兒の物を愛するの情が成長し、天然を觀察する力が精細になつて、假に私などの想像して居るやうに、蝸牛の卷き目を笠縫ひの手業に思ひ寄せ、新た

に又一つのおどけない名を付與する者があつたとしても、若し單なる各自の趣向であつたならば、到底斯くまでの偶合は見ることが出來ぬ筈であり、又一旦は之を採用するにしても、それが幾代の轉訛を經て後まで、保存せられて居るわけは無かつたのである。だから發生の機緣はどんなつまらぬ事であつたにせよ、必ず或期間それが略全國中の生眞面目なる人にも、一度は最も正しい日本語なりとして、公認せられて居た時代があつて、程無く又次に現れたものに、其地位を讓つたと解するの他は無いのである。近代の言語生活に於ては、小兒の發案などは通例は省みられず、殊に漢字が教育の唯一つの手段となつてからは、一種新式の「成年用語」の如きものが出來て、追々に彼等を疎隔することになつたが、此點にかけては前代人はより多くの「子供らしさ」を持つて居た。子供が大人となる境に、改めて採用しなければならぬ語に限られて居て、其他は在り來りのものを踏襲することを便としたのであつた。始めてツブラがツブリと化し、乃至はメメツブリと呼ばるゝを耳にして、許し難く感じた人々の感覺に、恐らく中一代を隔てゝ容易に忘れられたことゝ思ふ。正しい正しく無いは要するに時代のものであつた。假に古今を一貫する正語なるものがありとしたら、ミナやツブラは消滅する筈も無く、加太豆布利とても亦今日の共存を

見なかつたであらう。

しかも新語の流傳に關しては、頗る著しい速度の差があつた。同じく日常の物の名の中にも、確かに生活の必要の上から、今一段の修正をしなければならぬもので、元のまゝに打棄てゝあるのもある。たとへば玉蜀黍は奥羽ではキビ、九州ではトウキビと謂ふ者がまだ多いが、それは中央部でいふ黍でも無く又唐黍でも無いのだから、全國交通の爲にはとくにも統一の必要があつたのを、今に雙方が知らずに居る有樣である。是とは反對にカタツムリやマイマイは、其前に既に共通のものであつたかと思はれるから、是は幾分か事を好んだ改訂であつた。然るにも拘らず、再び又國の端々にまで行き巡つたといふことは、全く單語の一つ／＼が持つて生れた特別の力、運とも境遇とも名くべきものであつて、言語の一般の法則のみを以て、説明することの出來ぬ現象であつたやうに思ふ。蝸牛に就いては我々は幸ひにデヱデヱ蟲の如き殊に適切なる例を知る故に、比較的容易に此推測を下し得るのであるが、他の多くの變化ある事物の名に於ても、恐らくは亦是と同樣に、今まで氣づかれなかつた個々の原因の、之を促したものがあるのであらう。後日機會が有つたら考へて見たいと思ふ丁斑魚なども其一つで、是には確かに童歌の關係は無かつた

獨り動植物などの稱呼には限らず、動詞にも形容の詞にも、はた又今少し込入つた物の言ひ方にも、人が頻りに變へたがり、實際また何度と無く變へて居たものと、一方には出來るだけ改めずに濟まさうとしたかと思はれるものとの、二通りの區別が有りさうであつて、これが若し自分だけの空想で無いと決するならば、今後の方言調査は豫めその問題を限ることが出來て、或は思つたよりも簡單な仕事になるかも知れぬ。

少なくとも一切の地方用語を採錄してしまつた上で無ければ、方言の學問に前進し得ないかの如き心配は、私のこのたつた一つの蝸牛考からでも、取除くことが出來ると信ずる。今ある諸國の蝸牛の歌によつて、我々は先づ童兒の唱へごとが、國語を新たにする一つの力であることを知つた。今まで無視せられて居た大切なる社會的因子であることを發見した。さうして其力が、止む時も無く展開して居たことに心づいたのである。子供がこの小さな蝸蟲を指に持つて、いつ迄も其擧動を熟視して居ようとしたのは古いことであつた。その最も簡單な興味が童詞となり、澤山の思辨を費すこと無くして、七つの音節をもつメエボロツボロ等となり、或はマイマイとなり、デツトーバツトーとさへなつて、しかも周圍に若干の同志を得たことは新らしい例であつた。デ

エデエやデエロが必ずしも其最初のもので無かつたことは、一語が地域の拘束を受けて居るのを見ても、容易に想像し得られることである。蝸牛を大小の隔絶した笠などの巻き目と比べることは、成人には實は出來ぬことであつた。四つある小さな角を棒とか槍とかに見立てることも、やはり子供で無くては六つかしい藝であるが、その二つのたとへを組合せて見ると、そこに面白い誰かのやうな姿が浮んで來る。殊に歌言葉となつて雨降る日毎にくり返されると、その適切なる印象が、青年壯年から老年の者までをも支配して、自然に前から有る語を疎んぜしむるに足りたであらう。乃ち今日は既に變化してしまつた様な、たわいも無い歌がもう恐らくは其頃からあつたので、古い語なるが故に必ず髯白き碩學たちが、衆議を以て決したものとも見るわけには行かぬのであつた。

歌詞の影響が新語の語形の上に著しいことは、別に幾つかの例を擧げなければ、まだ一般の贊成を得難からうと思ふが、少なくともカサツブレの複合の早く起つたのは、外に之を促すものがあつたからだらうとまでは言へる。中世は歌の句に五音の今よりも遙かに多く要求せられた時代であつた。それが七音の句の増加につれて、マイマイには殊に無數の複合形を生じたのだとも、

考へられぬことは無いのである。マイマイがカサのたとへより後に現れたといふことは、實は記錄に見えないからといふ以上に、確かなる根據もまだ無いやうであるが、私に取つては此事實が一つの見所である上に、それが京都を中に置いて東西に分布し、しかもツブに接し又[illegible]よりは内側の層であるが故に、其支配の此等より次であつたことを推定するのである。其後更に「出え出え」の歌言葉に、特に心を引かれるやうな事情が起つて、是も亦多くの土地に於ては、過去の一つの形になつて行かうとしたけれども、新たなる都市が偶然に其支柱の役を勤めてくれた爲に、尚東方の一角に在つて、對立の勢ひを保つことが出來た。さうして其代償としてたゞ一個の複合形を以て、正統と認めなければならぬやうになつたらしいのである。興味ある一つの問題は時勢が假に中央文化の優越を承認せず、各地に依然たる小標準語を擁して、割據する者があつたらどうなつたかである。最近の子供唄は、蝸牛に貝を出よなどゝいふ無理な注文をせず、或はその角を太鼓の撥と換へてやらうと謂つたり、又は二つの貝を向ひ合せて、勝負を爭はせようとしたりするものが多くなつた。その爲に加賀と北武藏と奧州の北端に、ツノダシといふ名稱も既に起り、ベコとか小牛とかいふ類の語も、それぞれに出來かゝつて居た。若しも調子の面白いよい

文句が唱へ出されて居たならば、それが又新たに覇業を成就したかも知れぬのであつたが、其折しも近頃の所謂匡正運動が漸く盛んになり、一方には又小學校の教科書に、デンデンムシムシカタツムリの歌などが、ほんの何心も無しに採入れられた爲に、端無くも爰に三國鼎立の如き形勢が定まつて、其他の地方語は古きと新しきとを問はず、誠に肩身の狭いものとなつてしまつた。今後の文藝が更にこの用語の窮屈を突破つて、もう一度自由なる言葉作りの時代を現出する爲には、我々は稍長い間、考へ且つ待たなければならぬことになつた。是が最も要約せられたる日本の蝸牛の文化史である。

　自分がこの方言周圏論を奉じて居る態度は、他の今までの多くの信仰慣習に關する意見と同樣に、見る人によつては定めて心弱く又遠慮に過ぐるとも評せられるかも知れぬ。併し今尚斯ういふ法則の存在を認めない人々を強ひて說き伏せようとすることは、日本では誠につらい事業である。私は若しそんな力が殘つて居るならば、寧ろ之を轉用して今少し弘く材料を集めて置く方がよいと思つて居る。實際あまり久しく此問題に携はつて居ると、日當りで働いて居た者が家に入つたやうに、果してもう此位で證據は十分なのか、又どの點に於て證明が足らぬのかが、自分でははは

つきりとわからない。だからどうしても一度は稍冷淡な人々の、批評を乞はなければ濟まぬのである。其上に我邦の方言採集は、今はまだ國の三分の一以上に行渡らずに居る。國家文化の推進團體が、自ら必要を認めて手を下すのは是からである。故に今までの資料ばかりで十分であらう筈はた無からうが、兎に角に今後尚無數の採集と新事實とが、追加せられることだけは疑ひが無い。さうして私はその將來の自然の裁判が必ず蝸牛考の著者に有利なるべきを期待する者である。たゞ最終に一つ、辯護して置く必要のあることは、國の一隅のみに孤立して、僅か一つの異例の存するものが、至つて古きものゝ破片であるか、又は甚だ新しいもの、苗にして秀でざるものか、比較が不可能であつてまだ決し得なかつたといふ不幸である。是がこの南端の想像の何れに屬するかによつて、私の假定も亦若干の變更を加へらるべきであつたが、現在の事情に於ては是を全く無かつたものと同一視して、一旦の意見を述べて置くの他は無かつたのである。弱點は或はこの側面から暴露するかも知れぬ。例へば日向の宮崎市附近のジーンゴロは、果して秋田縣北部のチンケ若くはツンケマゴシロ、或は加賀國の田舎に在るチヾマヽや、尾張知多郡のマタクロなどゝ、何等の脈絡が無かつたものかどうか。北陸道各地のカエツツレ、若くはカエカエツモルの類

は、羽後田澤湖畔にあるといふケエブロ、又は豐後竹田附近のイエカエルやイエカルー家負ひーと、單に偶然に併發した新語であつたか。但しは又蝸牛をカヒといふ風が可なり古くからあつた名殘であるか。斯ういふ幾つかの特殊の例に對しては、わざとまだ自分の推測を揭げて置かうとしなかつた。さうして是をも將來の學問の、愉快なる目標の中に算へて居るのである。蝸牛の問題は甚だ小さいけれども、私はまだ〳〵今日の學問だけでは、完全に解決し得るもので無いと思つて居る。

ちやうど今から三年前の人類學雜誌に、四ヶ月に亙つて連載した論文を、殆と全部に亙つて書き改めて見た。南方の意見に差がある點は、即ち後の資料によつて改訂したものである。

昭和五年四月

蝸牛異名索引

本篇の細叙を省略し、且つ今後の採集者の參考に供すべく、現在知られて居る二百四十餘の蝸牛の方言を五十音順に列ねて見た。各項下の數字は、本文中その語に言及した個處の頁附であり、數字の無いものは本文に引用しなかつた異名である。

地名は其郡又は市町村に、其語が行はれて居ると報ぜられた土地である。勿論其以外の地にも多く存するであらうが、多くはまだ確かならず、又一々之を擧げることも出來ない。地名を注記せぬ分は殊に分布の弘く又よく知られて居るものである。

郡以上の大きな地域に於ては、必ずしも全部に亙つて其言葉があるといふのでは無い。たま／＼各自の知る限りの町村には無くとも、それを以て直ちに此表を疑はぬやうにしてもらひたい。全體に「存在せず」といふ土地人の言明よりは、「存在す」といふ報告の方が信を置き易い。といふわけは前者には誤謬が有り得、後者には虚僞が有り得ないからである。

方言は一つの土地にも同時に幾つか存在する。故にこの一種より他に行はれて居ら

ぬといふ迄では勿論無い。たゞさういふ場合にも、人により或は家によつて別に[illegible]名として使ふといふことはあらうが、それを究めることは不可能である。結局此表の地名は、「其土地の住民中に此語を使ふ者もある」といふ意味に解してもらふより他は無い。

同じ一つの語でも、言ふ人によつて些しの差があり、聴き取る人によつても書き方のちがひはある。成るべく同じだらうと思ふものを二度掲げぬやうにはして居るが、まだ若干の重複は免れぬことゝ思ふ。

将来の採集者は、此表に見えぬ蝸牛の名を耳にするたびに、出来るだけ精密に其話者の育つた土地を注記してそれを以て本篇の補充又は改訂をせられんことを希望する。

カイナメラ	伊豆神津島	五一
カイムシ	越中	
カイロロ	越中	
カエカエツノダス	越中氷見郡宇波村	二二
カエカエツブリ、カエカエツモル	越中上新川郡針原村	一四七
カエカツギ	越中婦負郡音川村	
カエツブリ	越中氷見郡	一四八
カエツムリ	陸中盛岡市	
カエツモリ、カエツブリ	越中下新川郡	七七
カエボボ	越中婦負郡寒江村	
カエンコノアルナメクジラ	陸中盛岡市	五一
カキミナ	「鹿兒島方言集」	一一四
カサツブ	岩代大沼郡、河沼郡	七七

蝸牛考

カタジ	紀伊熊野那串本	七
カタッタァ、カタカタ	大和十津川	六〇
カタタン	伊豫喜多郡	八〇
カタツバリ、カタツムリ	〃	一九
カダツブレ、カサツブレ	羽後秋田市	[illegible]
カタツンバリ	佐渡外海府、大和十津川	[illegible]
カタツボ	伊勢度會郡	[illegible]
カダツムリ、カサツブレ	羽後平鹿郡	[illegible]
カタツモリ、マメッジコ	下野上都賀郡	[illegible]
カタト	伊豫宇和島	[illegible]
カノタナムリ	土佐高知市	[illegible]
ダト	丹後加佐郡	[illegible]
カナツブ、カナツンブ	羽後河邊郡	八〇

シダミ	同　県　島	一二二
ジャンゴロ	日向宮崎郡生目	一四八
シンナン	沖縄本島辞滙	一二四

セ

ゼンマイ	筑　前　博　多	

タ

ダイダイムシ、ダェダェムシ	出雲松江市	一七
ダイリヨウ	對　馬（一　部	一六
ダイロ、ダイロウ、ダエロ	…………	一八
ダエロウカン	上　野　多　野　郡	
ダエロダエロ	羽前米澤、越中愛本	
ダシミ、ウミ、ウ	加　賀　河　北　郡	
タツボ、デンボロ	下總海上郡高神	二七

チンナンモウ　同上名護　一二一

チンニャッ　奄美大島北部　[illegible]

チンニャマ　同古仁屋　一二二

ツ

ツウナメクジ　肥後玉名郡　[illegible]

ツウノアルナメクジ　肥前諫早　[illegible]

ツグラメ、ツングラメ　……　一二九

ツッガメ、ツッガメジョ　肥前五島　一三〇

ツダミ、チダミ　八重山郡石垣島　[illegible]

ツドロガエドロ　越中下新川郡經田　八三

ツノダイシ　陸奥五戸　[illegible]

ツノダシ　加賀金澤、陸奥津輕及八戸等　[illegible]

ツノダシミョミョ、ツノツノミョミョ　越中東礪波郡井ノ口　[illegible]

ツンノデイロ　上野群馬郡
ツンノンデエショ　同郡綿貫
ツンブリ　美濃揖原、丹波福知山　六
ツンミッツ　喜界島　三
ツルマメ　肥前平戸　二〇
ツロロ　越中下新川郡

テ

ディアイロ　岩代安積郡安達郡
テイブ　「若越方言集」
デエデ　若狭大飯郡
デエデエ　伊勢松阪
デエデエムシ　…
デエボロ、ダイボロ　下野南部

ネ

ネエボロ、ナイボロ	下總結城郡猿島郡
ネエボロツボロ	下野芳賀郡
ネギロ、キネキネ	三河碧海郡
ネヤボロ	下總河內郡、芳賀郡

ヘ

ベエコ	常陸久慈郡、多賀郡
ベココ	陸中遠野「見聞」
ヘビタマ	同鹿角郡
ヘビタマグリ	同　上閉伊郡等
ヘビノテマクラ	仙臺「物類稱呼」
ヘリ	越後「俚言集覽增補」

ホ

ネ

ヘ

ホ

マイマイツボロ	常陸南部	四一
マイマイツムリ	武藏橫濱市周圍	
マイマイツンブリ	遠江磐田郡	
マイマイツンボ	同郡浦川	
マイマイドン	同榛原郡	六四
マイモヅ	武藏西多摩郡氷川	四八
マエボチツボロ、メエボチツボロ	常陸新治郡	三五
マエマエ	越中氷見郡神代	
マシジロ	尾張知多郡	一四八
マタグラ、タマグラ	仙臺市	九八
ママダイロ	信濃飯田	四八
ママデ	紀伊南牟婁郡阿多和	四二
マメクジ	三河岡崎市及南設樂郡	五三

ミョミョツノ　能登能美郡　四四

ミャミャツノダシ　越中上市　[illegible]

ミョミョツノダセ　同出町　[illegible]

ム

ムナムシケ　「鹿兒島方言集」　一三〇

メ

メエダセ　伯耆境港　四四

メエツムリ　下總佐倉

メエボロ、マイボロ　常陸南部　三九

メエボロツボロ　下總北相馬郡　三九

メエメ　尾張愛知郡

メエメエ　三河幡豆郡等

メエメエカンカ、メエメエカンケン　上總夷隅郡

メメンデエロ	信濃下伊那郡	
メャメャア	安房	四五
メミミンザラモ	能登鹿島郡鏡目等	四一
メンメン	陸前遠田郡涌谷	四一
メンメンカエブツ	越中高岡市	四六
メンメンカエボ	同　中新川郡大岩	四六
メンメンカエボコ	同　射水郡海老江	
メンメンダバゴロ	陸前遠田郡	四二

モ

モイモイ、モオイ	石見大森	四五
モオモリ	出雲今市	四六
モオロモロ、モンモロ	「出雲言葉のかきよせ」	四〇
モモウズ	甲斐北都留郡	四六

蝸牛考

與那國島　ンダミ

宮古島平良　ンムウナ、ウウナ

蝸牛異稱分布圖索引

ナ　デンデンゴラムシ
ラ　デンデンガラモ
ム　デンデンケェボン
ウ　デンデンベエコ
キ　デンデンダイロ
ノ　アカハラデンデンムシ
オ　デデカマ

茶色　マイマイ系

イ　マイマイ、マエマエ
ロ　マアマイ
ハ　マアメ
ニ　マアヨ
ホ　ママデ
ヘ　ママダイロ、マンマンダイロ、
　　メンメンデエロ

ト　メーメ、メーメエ
チ　メンメン
リ　メェメッポ、メメップ
ヌ　メエメエヅ
ル　マイモヅ、モモウズ
ヲ　モオイ、モイモイ
ワ　モオモリ、モオロモロ、モンモロ
カ　メメンジヨ
ヨ　メエダセ
③　メエメエツノ
タ　メンメングバコロ
レ　メンメンカエブツ、メンメンカエボコ、
　　メンメンカエボ
ソ　メンミンガラモ
ツ　ミヤアミヤア、ミヤアミヤアコ
ネ　ミヤアミヤアキンゴ

赤色　カタツムリ系

- イ　カタツブリ、カタツムリ
- ロ　カタツモリ
- ハ　カタカタ
- ニ　カタカタバイ
- ホ　カタタン
- ヘ　カタト
- ト　カタジ
- チ　カタクジリ
- リ　カッタナムリ
- ヌ　ガト
- ル　カサツムリ
- ヲ　カサツブリ
- ワ　カサツブレ、カサツンブレ
- カ　カサツブ
- ヨ　カサノマイ、カサンメ
- タ　カサッパチ、カシヤパチ
- レ　カダツブレ
- ソ　[illegible]
- ツ　カナツブ

青色　ツブリ系

- イ　ツンブリ
- ロ　カエツブリ、カイツブレ
- ハ　カエツムリ
- ニ　カイツグラ
- ホ　リンツブリ
- ヘ　[illegible]
- ト　ツノラメ
- チ　ツッガメ、ツッガメジョ
- リ　ツルマメ

ヌ　ツンツングラメ
ル　ツンナメ
ヲ　マメツングリ
ワ　メエメエツングラメ
カ　ツムクリ
ヨ　タマグラ、タンマグラ
タ　タンバクラ
レ　ヘビタマグリ
ソ　ヘビタマ
ツ　カマグラ
ネ　マタグラ

緑色　ナメクジ系

イ　ナメクジ
ロ　ナメクジラ・ナメクジリ
ハ　ナメグズリ

ニ　ナメクグリ
ホ　ナマイクジリ
ヘ　ナメクジ
ト　マメクジリ、マメクジラ
チ　マメツジ
リ　メメクジ
ヌ　ツヴナメクジ
ル　ツヴノアルナメクジ
ヲ　カエンコノアルナメクジラ
ワ　カイナメクジ
カ　カイナメラ
ヨ　リイリツキ、リエリツキ
タ　カイカイクジリ
レ　イエモチ
ソ　イエリツキ
ツ　イエカル




凡例
黒色　デデムシ系
茶色　マイマイ系
赤色　カタツムリ系
青色　ツブリ系
紫色　ナメクジ系

「言語誌叢刊」發刊趣旨

「言語誌叢刊」發刊趣旨

言語の發達と變遷のうちに、その民族生活は反映するものである。我々が人文の事象を觀察するに當り、複雜な關係を闡明する鍵として言語の智識が、非常に大きな役目を果す場合が多く、近時、言語學の重要性が他の學問研究に尠からず認められて來た所以でもある。

民族の生活するところには必ずそれぞれの言語の系統が發達して居り、而も時代と共に絶えず分化し轉化する。殊に言語が、文字によつて傳達される場合には、多く一定の文語體となつて遺される爲めに、その民族生活に生きて語られた言葉そのまゝの姿は段々に忘れられ亡び行く傾向が著しい。そこで、

一、特にこの亡び行く言葉を記錄保有し、その分布地域を調査し、同時に今まで斷片的にしか書き留められてゐなかつた舊い文書を蒐集するばかりでなく、

一、隣接諸民族の言語をも比較研究して、日本の言語との關係を明かにする事は

普ねく社會文化の研究に向つて、最も新らしい且つ緊要な一寄與であると思ふ。

我々同人が、茲に「言語誌叢刊」の發刊を計畫し、日本各地方の方言並びに東方諸民族の言語について、系統的にその貴重な調査研究の資料と成果とを江湖に紹介せんとする微意も亦即ちそこにある。

希くば、廣く同學同好の士の、この叢刊に來つて、我々と共にこの仕事の達成に助力せられん事を。

昭和五年六月

藤岡勝二

新村出

柳田國男

昭和五年七月五日印刷
昭和五年七月十日發行

定價壹圓八拾錢

新定價 [illegible]圓六拾錢

蝸牛考

版權所有

第一刷

著者　柳田國男

發行者　尾高豐作
東京市[illegible]二三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區[illegible]町三丁目十七番地

[illegible]社

發賣所
東京市神田區駿河臺
北甲賀町二十三番地
刀江書院
電話神田（二五）[illegible]
振替東京七三一一八